
仮面ライダーディケイド Lonely Journey

カゲロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド Lonely Journey

【Nコード】

N3772U

【作者名】

カゲロウ

【あらすじ】

一人の青年進藤サイガは様々な世界を旅していた。そして、サイガの瞳が見るのはそれぞれの信念を持った戦士たちの最期。サイガは悩み苦しみながらも旅を続ける。自分の世界を救うために。自分の世界を救うために破壊者としての力を振るうサイガ・・・その旅の先には果たして何が待っているのか。

『ディケイド誕生』（前書き）

この作品は俺の別の作品である『魔法少女リリカルなのは』世界の殲滅者ディガルド』の番外編で本編の登場人物の一人である進藤サイガの過去の物語です。良かつたら本編も読んでください。

『ディケイド誕生』

此処は『仮面ライダー』のいない世界。

その世界の住人である『進藤サイガ』は夕飯の買い物を済ませて小
さなアパートに帰っている途中だった。

サイガは20歳である。

だから、大学に受かってから両親のもとを離れて一人暮らしをして
いた。

「そういえば、最近帰ってないな。たまには顔でも見せてやらないとな」

サイガは最近会っていないが元気でやっているであろう両親の顔を思い浮かべながら自然と笑みがこぼれていた。

だが、その笑みは唐突に凍りつくことになる……。

「きゃあああ！？誰か助けてえええええええええ！！！」

突然悲鳴が聞こえたのだ。

サイガは一瞬驚いたが悲鳴のした方向に全力で走って行った。
だが・・・そこで見た光景はあまりにも現実離れしていた。

一人の女性が襲われていたのだ……怪人に。

カミキリ虫に似た本来『仮面ライダー 龍騎』の世界の怪人であるテラバイターは女性を食べようとしているのか女性の頭に向かって大きく口を開けながら顔を近づけていた。

「きやああああああ！！？」

先ほどサイガが聞いた悲鳴と同じような悲鳴が周りに響く

「危ない!!」

現実離れた光景にフリーズしていたサイガは女性の悲鳴で覚醒し女性を助けるためにテラバイターにとび蹴りをした。

テラバイターは女性を離して吹き飛び離れたがダメージが無いのか静かにこちらによって来る。

「逃げる!!」

「は……はい!」

サイガは女性を苦しテラバイターを殴ろうとしたがその拳は簡単に受け止められてそのまま投げ飛ばされてしまう。

「ぐっ……が……」

痛みに唸るサイガを見ながらテラバイターは背中に背負っていた巨大なブーメランを手を持ちためらうことなくサイガに投げた。

ああ……俺はここで死ぬのか?

ゴメン……父さん……母さん……もう会えなくなりそうだわ。

死を覚悟し目を瞑ったサイガだったがいつまでたっても痛みは来なかった。

サイガは覚悟を決めて静かに目を開けると……そこにはまるで自分とあの化け物を隔離したかのような巨大なオーロラがあった。そのオーロラから一人の男がサイガの方に歩いてくる。

「君が……進藤サイガ君だね?」

男はサイガの顔を見るなりそう聞いてきた。

サイガは何故自分の名前を知っているのかわからなかったが「ああ……あなたは誰だ？」と聞いた。

「私は鳴滝というものだ。率直に言おう……この世界は間もなく崩壊する！」

「なんだと!？」

突然オーロラから現れた男鳴滝の言われたことが余りにも自分の理解を超えてしまいサイガは驚いた。

すると鳴滝は一つのベルトと本のようなものを取り出しサイガの方に向ける。

「崩壊を止めたければ君は世界を旅しなければならない。これを受け取りたまえ!!」

「ふざけるな!!崩壊?旅?一体何のことだ?どうして世界が滅びる?」

サイガは鳴滝の言葉に怒りを覚えてかみつくように質問する。

「じゃあ……あれはどうする?」

鳴滝はそんなサイガの態度を無視しながらある方向に指をさす。

その先では先ほどサイガを襲ったテラバイダーがこちらに行こうとしていたがオーロラに邪魔されていた。

「原因はわからないが現在様々な世界がこの世界と融合しようとし

ておりそのため怪人がこの世界に現れるようになったんだ。それを阻止するためには君が仮面ライダーになって世界を旅しなければならない」

鳴滝はそう言っているがサイガにはどうしても一つ分からないことがある。

「どうして俺なんだ？」

世界が融合とか崩壊とかをこの際抜きにしてもどうしても自分が旅しなければいけないのかサイガにはわからなかった。

自分は普通の大学生なのにどうしても世界の命運を任されているんだ？そんな疑問がサイガにあった。

「君には素質があるからだよ・・・破壊者になる素質が・・・」

そう言ったとき今まで大きな変化がなかった鳴滝の表情が一瞬憎悪に満ちたがサイガは気づいていなかった。

「この世界を救うために・・・戦ってはくれないか？」

先ほどの憎悪に満ちた表情とは打って変わって優しそうな表情で鳴滝はベルトと本のようなものをサイガに渡そうとする。

サイガは静かにベルトに触れる。

その瞬間サイガの頭にそのベルトと本のようなものの使い方と様々なライダーや怪人の知識が流れ込んでくる。

サイガは静かに鳴滝からそのベルト『ディケイドライバー』と本のようなもの『ライドブッカー』を受け取る。

「戦ってやるよ・・・旅にも行ってやる・・・この世界を救うた

めに!!」

そう言うときサイガはディケイドライバーを腰に装着したあとバックル部を開きライドブッカードから取り出したカードを装填する。

この世界には……家族がいる。

友人もいる……。

失うわけにはいかない……だから、戦う。

「変身!!」

サイガは高らかに叫びディケイドライバーのバックル部を閉じた。

【カメンライド……ディケイド!】

電子音声とともにサイガの周りには人の形をした様々な色をしたシルエツトが現れる。

それらのシルエツトがサイガに重なりバックルから飛び出したプレートが頭に装着されるとサイガの姿は変わっていた。

仮面ライダーディケイド……それが今のサイガの名前である。

サイガがディケイドに変身すると同時にオーロラは砕けテラバイターがディケイドに襲い掛かる。

テラバイターはディケイドに殴りかかってきたがそれをディケイドは片手で受け止めて空いている手でテラバイターを殴りつける。

その攻撃によってひるんだテラバイターをディケイドは蹴り飛ばし腰に装着されているライドブッカードを取り出した後それを剣の形に変形させる。

ディケイドはテラバイターに向かって走りライドブッカードで斬りつ

テラバイターは反撃しようとディケイドに殴りかかったがその攻撃をディケイドはライドブツカの持つていない左手で防御しライドブツカの柄の部分でテラバイターの右肩を叩き付け左手で殴り飛ばす。

ディケイドは地面に倒れてうずくまっているテラバイターを警戒しながらも自分の両手を見ながら驚いていた。

先ほどまで殺されそうになるほど力の及ばなかった化け物と優勢に戦っている。

「やはり……そうか……」

先ほどの憎悪に満ちた表情で……。

「ふっ……ふはははははははははは……だが……これであの憎きディケイドを消すことができる……！はははははははははは……！」

自分がディケイドとしての力を与えたにも関わらずそれを消すことができる」と歓喜の表情で笑っていた。

そして、そのまま灰色のオーロラを出現させそれを潜って行った。

「貴様の破滅は近い！！・・・・・・ディケイドは私が潰すのだ！！！！」

そんな言葉をのこして・・・。

「はあああああ！！！！」

鳴滝の叫びは戦いに夢中になっていたディケイドには聞こえなかった。

ディケイドはライドブッカーをガンモードにしてテラバイターを撃ちまくる。

「そろそろ終わりにするぜ！！」

ディケイドはそう言うライドブッカーからカードを一枚とりだしバツクルに装填する。

【ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！】

電子音声とともにディケイドとテラバイターの間には十枚のカード型エネルギーが現れる。

ディケイドはジャンプした後それらのカード型エネルギーを一枚ずつ通り抜けていきテラバイターにとび蹴りを放った。

ディケイドのそのとび蹴り【ディメンションキック】を受けたテラ
バイターは爆発した。

ディケイドは変身を解いてサイガに戻る。

「倒したか……」

すると突然ディケイドライバーが光だし鳴滝がこの世界に来た時と
同じ灰色のような灰色のオーロラが出現した。

だが、鳴滝のとは違いそのオーロラにはぼんやりとだが『仮面ライ
ダークウガ』のマークが映っていた。

「クウガの世界か……」

サイガはそのオーロラを潜り自分の世界から出ていき別の世界に旅
立った。

こうして、進藤サイガの旅は始まった。

彼が世界に絶望することになる悲劇の旅が始まったのだった……
。。

『ディケイド誕生』（後書き）

次回予告

クウガの世界に行ったサイガ・・・そこで仮面ライダーダーククウガに変身する大道ユウスケに出会う・・・。ユウスケと意気投合したサイガだが、そこにグロンギが現れ・・・。

次回

『クウガの世界・・・最初の旅』

『クウガの世界・・・最初の旅』（前書き）

何か調べたらグロンギ語が紹介されていたから使ってみました・
・結構書くのが大変だった。因みに九つの世界は二話編成で行きた
いと思います。

『クウガの世界・・・最初の旅』

【クウガの世界】

サイガがクウガの世界に来た頃警察署では一人の青年が刑事らしき人と話をしていた。

「あの事件の内容解けましたか？」

「いや・・・まだだ。未確認が関係していることは間違いないと思うが奴等・・・今回はどういう法則に従ってるんだ？」

刑事に話しかけている青年の名前は大道ユウスケ。グロンギが人々の笑顔を奪っていることを知りグロンギと戦うことを決意した現代のクウガである。昔は旅をしていたが最近はこの長野県に滞在している。

そして、刑事の方の名前は三条カオル。一か月前に復活した超古代の怪人グロンギ（この世界では未確認生命体と呼ばれている）を追いかけておりユウスケの友人でありユウスケがクウガであることも知っており彼のサポートをしている男である。

二人が話している内容はその怪人グロンギが起きていると思われる殺人事件についてだった。

「被害者は全員若い女性なんですよね・・・」

「ああ・・・将来に希望を持っていた女達だよ。昨日で四件目だ」

ユウスケの質問にため息交じりに答えるカオル。
実際年齢や場所・・・さらには時間なども適当なため捜査をして

もたいして情報は得られなかった。

「一体……どうし!？」

ユウスケは何かを喋ろうとしたがその前に彼のお腹が喋りだした。
グ~~~~~と言う高い音が警察署内に響く。

「そう言えばお昼まででしたね。食べに行きましょうよ!!三条さんのおごりで」

「俺のかよ!!まあ……いい。最近新しいハンバーグ店ができたからそこに行くか？」

「よっしゃー!!ハンバーグは好物です!!」

ユウスケは拳を握りしめて喜ぶ。

どうやら三条カオルという男は人が良い……じゃなくて、良い人のようである。

ユウスケは「さあさあ、行きましょう」と言いながら三条を引っ張って行く。

「ここがクウガの世界か……?」

その頃サイガは町を探索していた。

「しかし、これは何だ？」

そう言いながらサイガは先ほどライドブッカーから取り出した三枚のカードを見る。

そこにはそれぞれクウガの顔・クウガのマーク・クウガとゴウラムらしきものの絵が描かれていたが色が灰色だった。

サイガは少し考えていたがやがてカードをしまい再び歩き出す。

「腹が減ったな・・・どっかで食事でもとるか」

そう呟きながら・・・。

「おいしいですね♪三条さん」

その頃ユウスケと三条はハンバーグ店でハンバーグを食べていた。

「あつ！すいませ〜ん。ハンバーグおかわりお願いします♪」

「かしこまりました」

ユウスケは物凄い勢いで・・・因みに今ので三皿目だ。

カオルはため息を突きながら財布の中身を見ている。

「食い逃げよ～～～!!!!」

すると店の中で先ほどユウスケの注文をとっていた女性が叫んでいた。

見ると一人の男が店を出ていき女性は男を追いかけていた。

「俺も行つてきます!!」

ユウスケもすぐに店を出ようとするが店員に止められる。

カオルが警察手帳を見せながら「私が残りますので」と言ったのでユウスケは一旦店を出ることができたが二人ともすでに遠くにいた。ユウスケも急いで追いかける。

食い逃げ犯は足が速いらしく女性を振り切つて逃げる。

後ろで女性が「食い逃げよ～～!!」と叫んでいるため彼を抑えようとしている人が何人かいたがそいつ等には全員タックルをかましていた。

「どけどけ～～!!」

すると前方に若い男の姿を発見する。
食い逃げ犯は再びタックルをかまそうとしたが・・・。

「危ないな」

男は軽くそれを避けて食い逃げ犯の足を引つ掛け転ばしていた。
遅れて店員の女性とユウスケも駆けつける。

「食い逃げはこいつで良いのか？」

その男・・・サイガは店員に聞くと店員が頷いたのでとりあえず
警察に電話して男は警察に連れて行かれ店員の女性も店代表として
同行した。

「君凄いな!!」

ユウスケはそう言ってサイガにサムズアップをする。

「まあ、あれぐらいはな。ていうかいい加減に腹が減ったわ」

どの店に入ろうかと悩んでいるところに食い逃げを捕まえたので
サイガは店探しを続行しようとするユウスケが「じゃあ、一緒に
食おうぜ!! おこるからさ」と言ってきた。

「まじか!?! じゃあ、お言葉に甘えるか」

ユウスケの言葉に甘えることにしたサイガは二人で先ほどのハンバ
ーグ店に行く。

「んで？なんで俺が三人分払うんだよ！！！」

食事を終えて金を払おうとすると三条が怒りをあらわにした。

ユウスケが戻ってきたかと思うと男を一人連れてきてそいつも一緒に食事をする・・・そこまでは良い。

じゃあ・・・何故伝票を俺に渡してあいつらは店の外に出たんだ？

「いやあ～～～おごるって言っちゃいまして」

「なかなかうまかったな」

店の外でそれぞれの感想を言うサイガとユウスケ。

三条はため息をつきながらも三人分払っていた。

やはりこの男は人が良い・・・。

『三条さん未確認が現れました。現在・・・』

「大道！！！」

「行ってきます！！！」

三条が言うと同時にユウスケは自身のマシンであるビートチェイサー12000に乗って先ほど言われた現場に向かう。

「俺も行く！！！」

サイガもマシンディケイダーに乗るとユウスケを追ってマシンを走らせる。

二人が現場に急行するとヤドカリに似たメ・ギャリド・ギが少女を襲い終えて逃げていた。

「待て!？」

ユウスケはギャリドを追おうとするが少女がかすかにだが動いていたのを見て急いで病院に運ぶことにした。

「・・・」

サイガは少女をユウスケに任せると再びバイクを走らせる。

ギャリドは人がいない山奥の道路に出ると突然撃たれた。

「バビロボ・ダ！？（何者だ！！）」

ギャリドがグロンギ語を話しながら振り向くとそこにはディケイドがライドブツカーのガンモードを構えていた。

「クウガ？ギジャ・・・チガグ（クウガ？いや・・・違う）」

ギャリドは目の前に現れたの者を一瞬クウガかと思ったが全く違う者だと気付き驚いていた。

「悪いがグロンギ語はわからねえわ。今回のゲゲルの内容を日本語で教えてろー！！」

残念ながらグロンギ語が分からないディケイドはいつでもライドブツカーを撃てるようにしながら質問する。

「ゴギゲス・ロボバ！！（教えるものか！！）」

ギャリドはそう言ってジャンプし周りの森に隠れてしまった。

「だから・・・言葉分からねえんだっつの」

デイケイドはそう呟くとサイガに戻り先ほどユウスケに教えられた病院に行く。

「どうだ？」

「何とか生きてたよ・・・」

「そうか」

病院に着くなりサイガは少女の状態を聞くとユウスケからは安心の声が届いた。

するとサイガは近くにいた三条のもとに駆け寄って「今回の事件の調査書を見せてくれ」と言った。

「ダメだ！一般の者には見せられない」

だが、三条は断る。

一応警察の機密情報だ。そんな簡単に一般人には見せないだろう。するとサイガはズボンのポケットから警察手帳を取り出し三条に見せる。

そこには『進藤サイガ巡査』と言う文字がサイガの写真とともにあった。

「警察の人間だ」

実はこの世界に来た時に何故か手帳がポケットに入っていたのだ。
どうやらこの世界ではサイガは警察だったらしい……。

「これで全部だ」

「ありがとう」

サイガは三条に渡された書類を読み始めるが被害者に共通点が無ければ殺害場所もばらばらだ。
読んでもあまり情報を得られないと思ったサイガは先ほど少女が襲われた場所に行くことにした。

「これは……」

少女が襲われた場所でサイガはあるものを発見する。

「そういうことか……」

一人納得したサイガは被害者の家に行きあることを聞き始めた。被害者の両親、同居していない場合は事件当時最後に被害者と一緒にいた友人に話を聞いたサイガは携帯であらかじめ教えてもらっていた三条に電話・・・出来なかったため一度警察署に戻った。どうやら別世界の為サイガの携帯は使えないらしい・・・。

「おい、三条」

警察署で三条を見つけたサイガは三条に何かを頼んでいた。サイガから話を聞いた三条は何かを考えていたがすぐに首を縦に振った。

「分かった。じゃあ・・・お前と俺とユウスケを護衛として三人の人に頼むでしょう」

「ああ・・・頼む」

意味深な会話をしてサイガはユウスケに会いに三条は三人の人に何かを頼むために別れた。

午後11時。

通行人も全くいない中二十代前半と思える女性は自転車に乗っていた。

すると・・・そこにギャリドが現れ女性を襲おうとする。

「きゃあああああ!!!!」

「変身!」

すると赤い装甲にクワガタをモチーフにした仮面ライダー。クウガマイティフォームがギャリドにとび蹴りをお見舞いする。

「クウガ!?!」

ギャリドもクウガの存在に気づき応戦する。

その間に先ほどの女性は無線で三条に連絡していた。

「三条さん。こちらに現れました!!今、四号が戦っています!!」

『分かった!君はそこを避難しろ!』

「はい」

三条の命令を聞くと女性は自転車に乗って逃げだす。

そのすぐ後サイガは三条に無線で連絡を受けていた。

『君の読み通りだった』

「やはりそうだったか。場所はどこだ？」

『町通りだが君は行かなくても良い。今第四号が戦っているから我々がいたら邪魔だ』

「四号ってユウスケのことだろ？」

『・・・・・・何故分かった？』

「おっ？冗談で言ったのに本当だったのか・・・・」

『お前な・・・・まあ、いい。そう言うわけだからお前はそこに行くなよ！！邪魔になるから！！』

「了解」

サイガはそう言うつと無線を切つてマシンディケイダーに乗って移動する。

町通りに行くために・・・・。

「やはりそうだったか・・・・」

サイガはそう言うつと運転しながらポケットからあるものを出す。それは・・・・『自転車の鍵』だった。

今回の事件でこれを発見したサイガは被害者の両親や友人に聞いて

ある一つのこと分かった。

それは・・・被害者は全員自転車に乗っていたこと。

五件目の事件・・・少女が襲われた時彼女は自転車に乗っていないかった。

他の四人中三人は自転車に乗っており一人は乗っていない。

だが、二人の被害者が襲われた近くにある駐輪場を調べた結果二人の自転車が発見された。

おそらく・・・三人は自転車に乗っている途中で襲われたが残りの二人は自転車に乗ろうとした瞬間襲われたのだろう・・・というのがサイガの結論だった。

だから、真夜中に三人の婦人警官を自転車に乗せるように三条に頼みその三人をユウスケと三条とサイガが見張る計画だった。

一応三人には細胞分解弾というグロングの細胞を分解する弾を込めた銃をもらっていたのでどちらに來ても大丈夫なようにしていた。

因みにユウスケはペガサスフォームになったときの武器として使うためにもらいサイガは念のためにもらっていた。

自分の考えが当たりグロングはユウスケのところに出現し現在クウガと戦っていると分かったサイガはバイクのスピードを上げた。

『クウガの世界・・・最初の旅』（後書き）

次回予告

ギヤリドを撃退したクウガとディケイド。だが、戦いの後の休息もなくクウガはその拳をディケイドに振るう。ディケイドは世界を破壊すると言っクウガ。己の世界を守るために今、二人のライダーが激突する。

次回

『クウガの世界・・・激突』

『クウガの世界・・・激突』（前書き）

クウガの世界の終わりです。自分の世界の人々の笑顔を守ろうとする二人のライダーの戦いは・・・。

『クウガの世界・・・激突』

メ・ギャリド・ギとクウガは人気のない荒れ地で戦っていた。

「お前が・・・罪もない子たちを殺したのか!？」

クウガは怒りの声を上げながらギャリドを殴る。

しかし、どこか悲しそうに殴っていた・・・。

「ボソギデジャス（ころしてやる）」

ギャリドは突然現れたクウガに敵対心むき出しで殴ろうとするがその腕をクウガにつかまれる。

クウガはそのままギャリドを背負い投げして倒れずに立ったギャリドを蹴る。

そして、クウガは構えて右足に封印エネルギーを収束させる。

「はあ!！」

そして、クウガに跳びかかってくるギャリドにとび蹴りを放つ。

「ガアアアア!！」

ギャリドは瞬時に右手でガードしたがキックの衝撃で後ろに吹き飛ばぶ。

「やったか？」

クウガはギャリドを倒したか確認するがギャリドは立ち上がってい

た。

しかし、右腕に封印マークが現れておりそこからひびがゆつくりと広がっていた。

それを見たギャリドは左手で右腕をつかむと……無理やり右腕を引っこ抜いた。

「なっ!？」

「ギャアアアアア!……!」

ギャリドは絶叫しながらその場を逃げようと高くジャンプする。

クウガは急いで追おうとするが先ほどの件に驚いてしまい反応が遅れていた。

【カメンライド……ブラスト!】

だが、逃げようとしていたギャリドに無数の光弾が当たりギャリドは絶叫とともに爆発した。

そこにディケイドが乗ったマシンディケイダーが走ってくる。

ディケイドはクウガの存在を確認するとバイクを降りる。

「どうやら間に合ったようだな」

そう言いながらクウガに近づいた瞬間クウガはディケイドを殴った。

「!?!?どういふつもりだ?ユウスケ!」

ディケイドは困惑しながらクウガに聞くがクウガはさらに殴るうとしてくる。

「この世界に何のようだ？破壊者！」

ディケイドはクウガの攻撃をかわしながら後ろにジャンプする。

「待て！！俺だ！サイガだ！」

そう言っでディケイドは変身を解いてサイガに戻る。

すると、クウガも「サイガ・・・？」とつぶやきながら変身を解く。

お互いに変身を解いたサイガとユウスケはにらみ合う形で対峙する。

「サイガ・・・そうか、お前が・・・」

「ユウス「変身！」」

サイガが何か言おうとした瞬間ユウスケはクウガに変身してサイガに跳びかかる。

「おい！？ちつ・・・変身！」

【カメンライド・・・ディケイド！】

サイガはクウガが襲い掛かってくる理由が分からなかったが変身しなければ死ぬと感じて変身する。

クウガはサイガの周りに現れたシルエットに弾かれる形で吹き飛ばされていた。

プレートが装着されて変身が完了したディケイドはクウガに近づこうとするが・・・。

「超変身！」

クウガは緑色の装甲のクウガペガサスフォームに姿を変えてバイクから細胞分解弾を取り出しそれはペガサスボウガンに姿を変える。クウガはそのままペガサスボウガンでディケイドを撃つ。

「ぐっ！おい、ユウスケ！？」

ディケイドはライドブッカーをソードモードにしてクウガの射撃をはじきながら近づくがクウガは高密度に圧縮された空気弾を放ってきた。

「ッ！？」

ディケイドは何とかそれをかわすがクウガは今度は青い装甲のクウガドラゴンフォームになって跳びかかってきた。

ディケイドがクウガの攻撃をかわすとクウガはそこらへんに落ちていた木の枝を拾いそれをドラゴンロッドにしてディケイドを叩き付けようとする。

「ユウスケ！いったいどういっつもりだ？」

ディケイドはドラゴンロッドの猛攻をライドブッカーで弾きながら聞く。

「お前は这个世界を破壊する！这个世界の人々の笑顔を守るために悪いが……死んでくれ」

最後の方は苦しそうに言いながらクウガはドラゴンロッドを振り回す。

「一体どういうことだ？」

ディケイドはドラゴンロッドをつかんでクウガに詰め寄りながらそう聞く。

「三日前俺が未確認を倒した時に預言者と名乗るオッサンに言われたんだ。もうじきこの世界に悪魔が来る……。みんなの笑顔を守りたければその悪魔を倒せとな！！冗談だと思っていたが現にお前はここに存在する！！」

クウガはドラゴンロッドを離してディケイドを蹴るとそのまま後ろにジャンプしビートチェイサーからハンドルでもあるトライアクセラーを抜く。

「超変身！」

クウガがそう叫ぶとその姿は紫色の装甲のクウガタイタンフォームに変わる。

同時に持っていたトライアクセラーもタイタンソードという剣に変わった。

ディケイドはライドブッカーをガンモードにしてクウガを撃つていくがクウガは平然とディケイドに近づきタイタンソードを振る。

ディケイドは瞬時にライドブッカーをソードモードにしてその攻撃を受け止めた。

「待ってくれ！！誤解だ……。俺は悪魔じゃない」

「ならばそのベルトにあるマークは何だ？」

ディケイドが弁解しようとするとかウガは左手でディケイドライバーにプリントされているクウガのマークを指さす。

「あのオッサンの言っていた通りだ・・・クウガのマークが何故お前のベルトに描かれている？どうしてこの世界に来た？」

「それは・・・」

ディケイドは言葉に詰まってしまった。

そのすきをクウガは見逃さずタイタンソードを握る腕に力を込める。タイタンソードはそのままライドブッカーをはじいてディケイドは斬った。

「ぐわああああ！！」

「超変身！」

クウガはマイティフォームに戻り吹き飛んだディケイドにとび蹴りをくらわす。

「ぐっ・・・いい加減にしろ！！」

ディケイドはクウガのとび蹴りをくらいながらクウガに回し蹴りをお見舞いした。

そして、二人ともそのまま吹き飛ぶ。

「サイガ・・・お前は一体何者なんだ？」

クウガは立ち上がりながら同じく立ち上がっているディケイドにそう聞く。

クウガ・・・ユウスケの心はすでに悲しみに満ちていた。

今日サイガに会ったが彼が決して悪い人物じゃないことは良く分かっていた。

グロンギのゲゲルを阻止するために頑張ったのも知っている・・・。

じゃあ・・・何故戦わないといけないのか？

ユウスケの心は悲しみに満ちていた。

目の前にいるサイガを倒さないとこの世界は破壊されると言われた。冗談と思いたいが現にディケイドは目の前にいる・・・それを無視すれば自分が守ろうとしている人々の笑顔は・・・なくなるだろう。

だが・・・彼の笑顔だつてなくしちゃいけない・・・。

だから、ユウスケは悲鳴に近い声でもう一度聞く。

「何者なんだあああああ！！！！」

「俺は・・・」

自分は普通の大学生・・・とは言えなかった。

今、自分が使っている力がすでに『普通』じゃないことは分かっている。

だが……自分の世界は今、滅びようとしていた。

家族を……友人を守るためには『普通』じゃないこの力を使わないといけない……。

じゃあ……俺って何者だろう……？

ディケイドはクウガの言葉を聞きながら考えていた。

相手は自分が何者が聞いている……ならば、答えるべきだ……。

「俺は……通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！！」

「サイガアアアアア！！」

クウガはディケイドにとびかかる。

戦いたくない……だが、戦わないと世界が滅びる。

クウガは拳を振るう……守りたいもののために。

ディケイドはクウガに応戦する。

戦わないといけない……自分の世界を守るためには。

ディケイドは拳を振るう……守りたいもののために。

二人の拳が激突し激しい肉弾戦となる。
想いは同じ……。

自分の世界を……守りたい。

だから、二人は決して望まぬ戦いをした。

クウガはディケイドの腹を殴りディケイドはクウガの頭を殴る。

お互いの攻撃でお互いがフラフラになるが構わずに拳を握る。

クウガのパンチをディケイドのパンチで相殺しディケイドのパンチをクウガのパンチが相殺した。

何故……戦わないといけない……。

答えは分かっている……。

だが、二人は納得できなかった。
出来るはずがなかった……。

お互いのパンチが頭に当たり二人は吹き飛ばす。

「サイガ……」

「ユウスケ……」

ゆっくりと立ち上がった二人……。

クウガは構えて足に封印エネルギーを収束させる……。

ディケイドはカードを構えてゆっくりとドライバーに装填する……。
。

【ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！】

それが・・・合図だった。

クウガはディケイドに向かって走りそのたびに右足に力がこもる。

ディケイドはカード型エネルギーを通過しながらクウガに向かう。

クウガも飛び上がり二人のとび蹴りは激突する・・・。

「はあああああああ！！！！！！」

辺りは爆発した・・・。

そして・・・爆発が収まったところに一人の男の姿が見えた。

進藤・・・サイガの姿が。

その手にはクウガのカードが握られていた。

「くそ・・・くそおおおおお！！！！！！」

サイガは叫んだ・・・。

自分は戦いに勝利した・・・決して望まぬ戦いに。

サイガの心は後悔でいっぱいだった。

けど・・・自分が死ぬわけにもいかなかった。

サイガはそう考えたがそれが言い訳なのは明らかだと思った。
お互いが自分の世界を守ろうとしただけなんだ・・・。

ディケイドライダーが光だしオーロラが現れる。

「まだ・・・旅は始まったばかりだもんな・・・」

サイガは自嘲気味に笑う。

「大道っ！！」

すると三条が走ってきた。

おそらく・・・ユウスケから連絡が無い為心配になったのだろう・・・。

「三条・・・やるよ」

サイガはクウガのカードを三条に投げた。

三条は受け取ったカードを見た瞬間驚いていた。

「進藤・・・これは・・・？」

三条はサイガにカードについて聞こうとしたがサイガはそれを無視してオーロラを潜った。

そのオーロラには『仮面ライダーキバ』のマークが映っていた。

『クウガの世界・・・激突』（後書き）

次回予告

サイガの訪れた世界。それはファンガイアと人間が共存する世界だった。そこで、サイガは人間を襲うファンガイアを倒す。すると、サガとイクサが現れる。ユウスケのこともあり彼らを倒したくないサイガはその場を逃げる。すると・・・その瞬間サイガは指名手配になった・・・。

次回

『キバの世界・・・奔走』

『キバの世界・・・奔走』（前書き）

前回結果的にライダーを倒してしまったサイガ・・・。
彼はその後どんな旅をするのか・・・。

『キバの世界・・・奔走』

【キバの世界】

キバの世界のある場所で巨大な城と一体化した竜がまさしく城のように動かないでいた。

その竜『キャッスルドラン』の中の皇帝の部屋ではこの世界の皇帝であるワタルという青年が椅子に座っていた。

「ワタル・・・俺だ」

「どうしたんだい？兄さん？」

すると、皇帝の部屋にきつちりとスーツを着た青年が入ってきた。彼はタイガ・・・この世界の皇帝であるワタルの実の兄である。

この世界はファンガイアと人間が共存している世界。

だが、たまに掟を破って人間のライフエナジーを吸うファンガイアもいるためこの世界では人間代表とファンガイア代表の二人の人がいた。

タイガはファンガイア代表でサガに変身する能力を持つ。

後、人間代表でイクサに変身するケイスケという青年もいるが今は不在だった。

「お前に客だ」

そう言ってタイガが連れてきたのはコートと帽子をかぶった一人の男性だった。

男性は部屋に入るとワタルに一礼した後「二人っきりで話したい

のですが・・・」と言う。

「兄さん・・・」

タイガはその一言でワタルの言いたいことが分かると静かに部屋を出て行った。

「僕に何の用ですか？」

「失礼・・・私は鳴滝というのですが。実は皇帝にこの世界の危機をお知らせしたいと思ひまして」

「危機？」

「はい・・・破壊者ディケイドの到来を・・・」

これらの会話は進藤サイガがディケイドドライバーを手に入れる以前の話だった・・・。

そして、これらの会話から数日が経ち・・・。

「ここがキバの世界か・・・？」

サイガはキバの世界を歩いていた。

「見たところ平和「きゃあああああ！！」！？」

サイガが独り言を言っていると女性の悲鳴が聞こえたのでサイガは急いで声のした方向に向かって走る。

「あの・・・？この行為は掟に違反していますよ？」

「黙れ・・・ファンガイアとしての本能を大切にしないではいけません」

女性は怯えながら『ファンガイアは人間を襲わない』という掟を伝えようとしていたがカマキリに似たファンガイアであるマンティスファンガイアは聞く耳を持たず女性のライフエナジーを奪おうとする。

「やめろおおおおおおお！！！変身！」

【カメンライド・・・ディケイド！】

吸命牙が女性の首筋に刺さろうとした瞬間サイガが駆けつけバックルを閉じ走りながらシルエットが重なるとディケイドになってマンティスファンガイアにとび蹴りをお見舞いした。

「早く逃げろ」

「は・・・はい」

「貴様、よくも邪魔を！」

ディケイドが女性を逃がすとマンティスファンガイアが怒って大鎌を振り下ろしたがディケイドはソードモードのライドブッカードでそれを防ぎ逆にマンティスファンガイアを斬った。

「ぐっ・・・このお!!」

マンティスアンデットは大鎌を何度も振っているがディケイドは余裕の態度でそれらを全て防いでいた。

「これでもくらえ!」

【アタックライド・・・スラッシュ!】

ディケイドはカードを装填すると強化された斬撃でマンティスファンガイアを斬る。

「ぐっ・・・覚えてろ!」

マンティスファンガイアは捨て台詞を言ってその場を去ろうと高くジャンプしたがジャンプしたマンティスファンガイアに無数の銃弾と一本の鞭が刺さり絶叫と共にマンティスファンガイアは爆発した。

「掟を破った者には罰を与える・・・」

そんな声が聞こえるとジャコーダを持ったファンガイア代表の戦士仮面ライダーサガとイクサカリバーを持った人間代表の戦士仮面ライダーイクサ・バーストモードがゆつくりと歩いてきた。

サガは前方にいるディケイドの姿を確認すると隣にいる戦に話しかける。

「遂に現れたな・・・破壊者。この世界は破壊させない！！今この場で殺してやる！」

イクサとの話を終えたサガはジャコーダを剣の形であるジャコーダロッドにしてディケイドにとびかかる。

イクサもイクサカリバーをカリバーモードにしてディケイドにとびかかる。

ディケイドはライドブッカーを使ってサガの攻撃は防いだが後から来たイクサの攻撃をくらって吹き飛ぶ。

「二人相手はきついな・・・ユウスケ。力を貸してくれ！」

ディケイドはライドブッカーからカードを取り出しバツクルに装填する。

【フォームライド・・・クウガ・ドラゴン！】

すると、ディケイドはクウガのドラゴンフォームに姿を変えた。

Dクウガはドラゴンロッドのリーチを生かして二人を薙ぎ払うように倒していく。

イクサはイクサカリバーをガンモードにしてDクウガを撃つがDクウガはドラゴンロッドを振り回して銃撃を防ぐ。

すると、サガが鞭のようなジャコーダビューとでクウガの腕を掴み上空に投げ飛ばした。

イクサは空中で防御ができないDクウガをイクサカリバーで撃ちまくる。

「なっ！？ぐわああああー！」

Dクウガは上空でダメージを負いながらカードをバツクルに装填す

る。

【アタックライド・・・ゴウラム！】

Dクウガは飛行してきたゴウラムの足をつかんだ後ドラゴンロッドをイクサに投げつけて更にカードを装填する。

【フォームライド・・・クウガ・ペガサス！】

Dクウガはペガサスフォームになると先ほどのドラゴンロッドをかわすために一旦銃撃を止めたイクサをペガサスボウガンで撃った。

「ぐわああああ」

サガはダメージを負ったイクサのもとに駆け寄るがその瞬間Dクウガはゴウラムから手を放しカードを装填する。

【フォームライド・・・クウガ・タイタン！】

そして、Dクウガは上空から地上に降りると同時にタイタンソードでサガを一直線に斬り慌てて立ち上がったイクサも斬った。恐ろしい重さで斬られたサガも続けてダメージを負ったイクサも吹き飛び立とうにも体が動かなそうだった。

その様子を見てDクウガはカードを取り出す。
ファイナルアタックライドのカードを・・・。

「（これを使えば勝てる・・・だが、俺はもう人を殺したくない！）」

Dクウガはファイナルアタックライドのカードをしまつて変身を解

きサイガの姿になった。

サイガはマシンディケイダーに乗ってその場を去る。

「くそっ！！逃がした！」

「奴め・・・なんて強さだ」

ディケイドがその場を去ると二人も変身を解きイクサに変身していたケイスケは地面を思いつき叩きサガに変身していたタイガはディケイドの強さを評価していた。

「ワタルにこのことを伝えに行くぞ」

タイガがそう言うときケイスケも地面を叩くのを止めてワタルのいるキャッスルドランに向かった。

その戦いから一時間後・・・サイガは近くにあったレストランで食事していると突然町中のテレビのチャンネルが変わりキャッスルドランの皇帝の部屋が映し出される。

皇帝の部屋にある椅子に座っていたワタルは静かに椅子を立ちゆつくりとカメラの前に立つ。

『国民のみんな！遂に・・・破壊者がこの世界に現れた！！人間は破壊者を見つけ次第イクサやサガに連絡してファンガイアは可能な限り破壊者を倒してくれ！くれぐれも無理はしないように・・・検討を祈る』

ワタルがそう言うつと画面が変わりサイガの写真とディケイドの写真映し出された。

「！？おいおい・・・」

サイガは慌てて周りを見ると周りの人間はみんな顔にステンドグラスのような模様が現れファンガイアになった。
そして、サイガの周りにいくつも吸命牙が現れる。

「クソ・・・」

サイガは慌ててテーブルを投げて吸命牙を退けるとレストランを出てマシンディケイドに乗ってその場を去る。

走っていると前方にファンガイアの大群が現れるがサイガはマシンディケイドで無理矢理突破した。
すると、周りから人間の投げたハサミや鎌や包丁や花瓶など様々な凶器が飛んでくる。

「グッ……」

サイガは誰かが投げた花瓶が腹に当たり危うくバイクから落ちそうになったが何とか体制を立て直し姿勢を低くしてバイクのスピードを上げる。

「変身！」

【カメンライド・・・デイクイド！】

シルエットが様々な凶器からサイガを守った後サイガに重なりサイガはデイクイドに変身した。
すると、デイクイドの左腕に鞭が絡まり引っ張られた。

「なに！？ぐわあ！！」

マシンデイクイダーから落ちるとサガとイクサがジャコードロッドとイクサカリバー・カリバーモードを倒れているデイクイドに振り下ろした。

デイクイドはとっさに腕でガードし二人を蹴って立ち上がるがファンガイアが次々と現れる。

「デイクイドオ諦めて死ね！！」

サガがそう言うのとファンガイアが一斉にデイクイドに襲い掛かる。
デイクイドはライドブッカーソードモードでファンガイアを次々と斬っていくがきりがなかった。

二対のファンガイアがデイクイドの両腕をつかみイクサとサガがイクサカリバーとジャコードロッドでデイクイドを斬った。

「ぐわああ!!」

更にいろんなファンガイアがディケイドを殴っていく。

「いい加減にしろ!!」

ディケイドは足でファンガイアを蹴り飛ばし何とか二体のファンガイアから両腕を離させようとする。

それを見たイクサとサガはフェッスルを構えてイクサはカリバーフェッスルをイクサナツクルに読み込ませてサガはウエイクアップフェッスルをサガーくに吹かせた。

【イ・ク・サ・カ・リ・バ・ア・ラ・イ・ズ・アツ・プ!】

【ウエイクアップ!】

ジャコードロットには魔皇力がイクサカリバーにはエネルギーが込められサガとイクサはディケイドめがけて武器を振った。

「うおおおおお!!!!」

ディケイドは吠えると両腕を思いっきり振った。

すると、ディケイドの両腕をつかんでいた二体のファンガイアはディケイドの前に押し出されディケイドの代わりにサガの攻撃とイクサジャッジメントを受け爆発した。

【アタックライド・・・スラッシュ!】

両腕が自由になったディケイドはカードを装填しサガとイクサと周りにいたファンガイアに強化された斬撃を食らわせた。

「何！？がはっ！！……………」

【カメンライド……クウガ！】

【アタックライド……ゴウラム！】

ディケイドスラッシュで二人同様ファンガイアがひるんだすきにディケイドはDクウガにカメンライドし再びゴウラムの足に捕まって空を飛んで行った。

「くそっ……………まてええええ！」

イクサはすぐにイクサカリバーをガンモードにしてディケイドを撃つがその銃撃は外れた。

「ここか……………」

ゴウラムに捕まったDクウガはキャッスルドランの城の部分の近くを飛んでいた。

「あいつらを相手してたらきりがない」

ディケイドはそう言うとカードを二枚取り出しバツクルに装填する。

【フォームライド……クウガ・ペガサス！】

【ファイナルアタックライド・・・クククウガ！】

Dクウガはペガサスボウガンから高密度に圧縮した空気弾をキャツスルドランに撃ち城の部分に小さい穴を開けた。

「はっ！・・・」

Dクウガはその穴からキャツスルドランの中に侵入しディケイドに戻った。

ディケイドはその部屋を出ると奥に進み最も奥にある部屋のドアを蹴破って侵入した。

その部屋はバラの花が床一面に落ちていた。

「誰だ？」

奥からテレビと同じ声が聞こえるとディケイドは一旦変身を解いて皇帝ワタルの座る椅子に近づく。

「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ・・・ってても十分すぎるくらい歓迎してもらったな・・・」

サイガの声を聞くとワタルも椅子から立ち上がりサイガに近づいた。

「ディケイド・・・」

ワタルとサイガはお互いににらみ合っていた。

『キバの世界・・・奔走』（後書き）

次回予告

遂にワタルと出会ったサイガ・・・だが、ワタルは皇帝として国民のためにサイガを倒そうとする。ユウスケのこともあり話し合いで解決しようとするサイガと国民のために立ち上がるワタル。今・・・二つの想いがぶつかる。

次回

『キバの世界・・・皇帝』

『キバの世界・・・皇帝』（前書き）

その世界のライダーの強化形態がこれ以上出てくるかは未定です。

『キバの世界・・・皇帝』

（22年前）

22年前、現在ワタルとサイガが対峙している部屋では二人と同じように二人の男が対峙し一人の女は静かにその光景を見ていた。

「マヤ！！分かっているのか？お前がファンガイアを裏切ればタイガの命は無いぞ！！」

ロックミュージシャンのような風貌をした男は目の前にいる男を無視してその後ろにいる女に恐ろしくドスのある声でそう言う。

この男こそがこの世界のファンガイアの王であるキングだった。

キングはキバツバツト？世を手を持ちながら女・・・キングの妻だったが目の前の男を愛しファンガイアのクイーンとしてのプライドを捨てたマヤを見る。

「安心しろ！タイガは俺が守る！マヤの息子は俺の息子だ！断じてお前などに殺させん！」

キングの言葉に答えたのはマヤではなくマヤが惚れキングの憤怒の対象となっている人間の男オトヤだった。

オトヤは緊張感のない声でそう言う。

だが、その言葉は自信にあふれていた。

「貴様・・・マヤはファンガイアだぞ！人間と結ばれては行けない！！人間は我々の食い物だ」

オトヤの言葉に怒りが増したキングはオトヤをにらみつけながらそう言うがオトヤは気にも留めない。

「人は・・・食べ物じゃないわ。人には人の未来がある」

マヤは静かにキングの言葉を否定した。

キングはマヤがそんなことを言ったことに一瞬動揺したがすぐに怒り悲しみ吠えた。

キングは吠えながら真の姿でもあるバットファンガイアになる。

「殺してやる・・・オトヤア～～！人間はファンガイアに食われていれば良いのだ！！」

バットファンガイアはそう言うとおトヤの首をつかんで部屋の壁を壊しキャッスルドランを出て外に飛び立った。

「ぐっ・・・があ・・・」

上空でつかまれていた首を離され地面に落下したオトヤは苦しそうにしながらも立ち上がる。

「蝙蝠もどき・・・俺に力を貸せ～～！！世界を変える力をおおおおおお！！」

『良いだろう・・・マヤの惚れた男の底力、見せてもらう。ガブリ』

「ぐっ・・・」

オトヤの呼びかけに応えたキバットバット？世はオトヤの手の甲を

噛む。

途端にオトヤは苦しそうにうめいたがキバットバット？世は自分でベルトに装着された。

そして、オトヤは闇のキバの鎧を装着しダークキバに変身した。

「馬鹿な！？人間ごときがキバの鎧を装着したと・・・しかも、？世までも・・・貴様あ！！人間のくせして一体いくつ俺から奪っていく気だ！！」

バットファンガイアは最初オトヤの変身を驚いた後マヤだけではなくキバットバット？世までに裏切られたことを怒った。

「人間もファンガイアも関係ない・・・俺とマヤがそれを証明してみせる」

ダークキバはそう言うバットファンガイアに殴りかかりバットファンガイアもそれに応戦した。

お互いに激しく殴り合っていた。

ダークキバが殴られればダークキバは殴られながらバットファンガイアを殴りバットファンガイアが殴られればバットファンガイアは殴られながらダークキバを殴る。

マヤはその光景をキャッスルドランの破壊された部分から静かに見ていた。

ダークキバとバットファンガイアはお互いの顔面を殴って二人とも吹き飛び倒れた。

バットファンガイアより先に立ち上がったダークキバはフェッスルをキバットバット？世に吹かせた。

【ウェイクアップ3！】

一人の人間は静かにそして迷うことなくその禁断の笛を吹かせた。

「そ．．．それは．．．貴様あ死ぬ気か!？」

バットファンガイアはキバットバット?世の発した言葉により目の前の人間が行った行為を理解する。

使えば間違いなく使用者は死ぬ禁断中の禁断の笛を目の前の男は使
用した。

「貴様．．．そんなにマヤが大事か？」

「ああ．．．大事だ。だが、それだけじゃない」

バットファンガイアの問いにダークキバは答える。

「俺は人々の心に宿る音楽も守りたい．．．そして、ファンガイ
アの心に宿る音楽もな」

ダークキバは言う。

バットファンガイアは啞然とした。

目の前の男の言った意味を理解した．．．だが、それは実現不可能
だ。

「ファンガイアと人間が共存などできるものか!！」

「何度も言わせるな．．．人間もファンガイアも関係ない」

ダークキバは強い決意を秘めた声でそう言う。

そして．．．ダークキバ最強の必殺技【キングスワールドエンド】
は発動した。

〈現代〉

この世界の皇帝ワタルと破壊者進藤サイガはお互いにお互いを見ていた。

「デイケイド・・・僕はあなたを倒します」

ワタルの言葉を待っていたかのようにキバットバット？世がワタルの周りを飛び始めその腕にかみつく。

「待て！俺は戦う気はない！」

だが、サイガは腕でそれを制止させた。

彼はもうライダーを倒す気などなかった。

そんなの・・・クウガだけで十分だった。

「？あなたはこの世界を破壊しに来たんでしょう？何故戦いを拒むんです？」

予想もしていなかったサイガの態度にワタルは困惑しながらサイガ

に質問する。

サイガは言わなければ戦わなくてはいけないことを感じ取った。

「俺は俺の世界を救うために世界を旅しているんだ！俺が旅をしなくては俺の世界が滅びる……だから」

「!？」

ワタルはサイガの言葉を聞くと驚愕の表情をした。

事情は違えど彼も自分の世界を守るために戦っているのだ。

自分たちと同じように……。

だが、サイガの戦う理由を聞きそれに共感したところでワタルのやるべきことは変わらなかった。

ディケイドを倒さなければこの世界が滅びるのだから。

「そうですか……ですが、僕はここであなたを倒します」

「ワタル……」

ワタルは静かにそう言ってサイガも悲しそうな表情をしながらも目の前の青年の名を呼ぶ。

戦わなければいけない。

クウガの世界と同じだった。

二人とも自分たちの世界を守りたいのなら戦うしかないのだ。お互いの命を懸けて……。

【カメンライド・・・デイクイド！】

その瞬間二人の姿は変わり戦士になった。
サイガも迷いを捨てた。

何が何でも自分の世界を守りたいから・・・。

「ワタル（君）！！」

二人が構えた瞬間部屋のドアが勢いよく開けられタイガとケイスケが現れる。

二人は逃げたデイクイドがキャッスルドランの方向に向かったのを見て急いで追いかけてきたのだ。

デイクイドの姿を見るとタイガはジャコーダをケイスケはイクサナツクルを構える。

「やめてくれ！！」

だが、突然大きくはないが十分響く声が部屋内に響いた。
タイガもケイスケも驚いている。

自分たちを止めたのはキバ・・・ワタルだからだ。

「何を言ってるんだワタル君！俺は戦うぞ」

そう言っただけケイスケはイクサナツクルを起動させようとしたが今度は右側から腕が伸びてきてケイスケの行動を抑えた。

「どっとうつもりだ？タイガ君」

ケイスケは自分の行動を抑えた右側にいる男タイガをにらみつけながらそう聞く。

タイガはケイスケを無視するとゆっくりと一歩キバに近づいた。

「良いのか？」

たった一言。

たった一言だけタイガは言葉をキバに投げかけた。

だが、その言葉には様々な意味があった。

手を出さなくても良いのか？死ぬかもしれないが良いのか？辛い戦いになるが良いのか？俺たちは・・・見ているだけで良いのか？

様々な想いをたった一言に凝縮してタイガはキバに聞いた。

タイガは父親が違うとはいえワタルの兄弟だ。

だからこそ言いたいことを一言にした。

それが・・・ワタルの意思だから。

「ありがとう・・・兄さん」

それが開戦の合図だった。

直後キバはディケイドに殴りかかるがディケイドはライドブッカーのソードモードでキバを斬った。

だが、キバは左手でディケイドの斬撃を受け右手でディケイドを殴る。

殴られてバランスを崩したディケイドをキバは再度殴ろうとしたがディケイドはそれを姿勢を低くしてかわしてキバの足を回し蹴りした。

ディケイドは回し蹴りするとすぐにキバから離れカードを装填する。

【アタックライド・・・ブラスト！】

両足が地面から離れたため地面に倒れたキバめがけて無数のマゼンダの光弾が被弾した。

「ワタル君！！」

時間にして数秒・・・戦いは終わった。

ケイスケは叫ぶがタイガは黙っていた。

タイガはこの戦いがどんな結果になるかと受け止めようとしていた。兄として。

「悪いが・・・俺は旅を止めるわけにはいかないんだ。許してくれワタル」

「何処に行く気ですか？僕はまだあなたの名前も聞いていないんですか？」

ディケイドは振り向く。

ディケイドブラストのせいでキバのいた場所は煙で良く見えなくなっていた。

だが、煙から声が聞こえてきた。

そして、中からキバはゆっくりと歩いてくる。

「サイガだ。俺の名は進藤サイガ・・・覚えておけ！」

ディケイドは無意識のうちに仮面の下で笑みを作ると自己紹介をした。

戦いの途中なんて関係なかった。

「デイクイド・・・いや、サイガさんが本気で戦っているというのに僕がそれに答えないというのはあなたにも国民にも無礼ですね。キバット！」

『ワタル・・・お前まさか！？』

「やめなさいワタル君！」

「ワタル・・・」

キバが何かを決めたような発言をするとキバがやろうとしていることを理解したのかキバットバット？世は驚いてケイスケはワタルを止めようと声を出した。

タイガも叫びたかったが静かに弟の名を呼ぶだけ・・・。

「サイガさん・・・僕はこの世界の皇帝です！！」

キバは突然皇帝宣言をする。

周りにいる人たちはそのことを十分承知していたがキバの言いたいことはそれで終わりではなかった。

「僕はこの世界を守りたい・・・父さんが命を懸けて作ったこの“ファンガイアと人間が共存する世界”を守りたい！！人間とファンガイア両方の心に宿る音楽を守りたい！！だから・・・」

キバはそこで一度言葉を切る。

もう誰も何も言わなかった。

デイクイドはキバの想いを正面から受け止めるだけ。

他の者はただその戦いを見守るだけ。

「だから・・・本気でいきます」

【キバって・・・行くぜ~~~~~!!!!】

キバットバット？世がそう言った瞬間キバの両肩の鎖カテナが外された。
キバの体を黄金の光が包んでいく。

キバの姿は変わって・・・いや、戻っていく？真の姿？に。
右足にあったヘルズゲートが体に移動してキバの姿は？真の姿に戻った？。

仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム。

今、確かにディケイド達の目の前には皇帝エンペラーがいた。

「馬鹿な・・・！？タツロットなしで!!」

ディケイドはまさしくありえないものを見ている気分だった。

キバがエンペラーフォームになるためには本来タツロットという小型ベクトルの竜族の力が必要である。

だが、確かに目の前にはエンペラーフォームがいた。

黄金のキバと呼ばれるファンガイアの皇帝のためにつくられた鎧を装着した真正正銘の皇帝がそこにいた。

「・・・くはっ!!!!」

エンペラーフォームとなったキバは突然苦しみだした。

「大丈夫か？」

「来ないでください!!」

キバに駆け寄ろうとしたディケイドをキバは追い払う。
今は戦闘ちゅうだった。

この二人の……。

一瞬倒れそうになったキバはザンバットソードを出してそれを支えにすると勢いよく立ち上がった。

「さあ、第2回戦を始めましょう」

「何故エンペラーフォームになれる？」

再び戦いを始めようとしたキバをディケイドは質問することで止める。

キバの様子を見る限り完全に力を制御しているようには思えなかった。

「簡単なことです……僕とキバットの力で鎖^{カテナ}を“無理矢理”外した」

「無理矢理？」

キバの言葉を聞いたディケイドはさらに質問する。

「ええ、僕とキバットの力では外すことすらできなかったのでガルルたちの力を借りて鎖^{カテナ}を外しました」

つまり、タツロットの代わりを三匹のアームズモンスターの力を使ってキバの鎖^{カテナ}を外したということだった。

だが、キバは先ほど鎖^{カテナ}を無理矢理外したと言っていた。

「黄金のキバの鎧は素質の無いものがつけるとその命を削り死に至る。ワタルは・・・素質が半分しかないのだ」

ディケイドの疑問を解くかのように観戦していたタイガが言った。その瞬間ディケイドは理解した。

ワタルは？ファンガイアの皇帝？としての素質があった。

だが、その体内に宿るのはファンガイアとしての力だけではない。

ワタルはマヤとオトヤ・・・・・・・・ファンガイアと人間の間に生まれた子だから。

つまり、黄金のキバの鎧はワタルのファンガイアとしての素質を認めてもワタルの人間の部分を認めてはいなかったということだ。

黄金のキバの鎧は素質の無いものがつけるとその命を削り死に至る

残酷な現実がそこにあった。

「変身を解け！ワタル！」

ディケイドは叫ぶ。

このままだとワタルは・・・・死ぬ。

だが、ワタルは静かに首を横に振った後・・・・ディケイドを斬った。

「あなたは何でここにいるんですって？世界を守るためでしょう？僕は自分の世界を守るためだったら命を懸けます！あなたは違ούνですか？」

キバは静かにそう言う。

決意のこもった声で……。

ディケイドを説得するにはそれで十分だった。

「俺だつて懸けてるさ……。命をな。お前の覚悟確かに受け取った！ さっきお前が言つた言葉を借りるぞ……。お前が本気で戦っているのにそれに答えないだなんてお前にも俺の世界の人にも無礼だな。行くぞ……。はあああああああ！！！！」

ディケイドは先ほどキバが言つた言葉を自分も言つとライドブツカ―を握る手に力を込めてキバに立ち向かった。

キバもザンバットソードを握る手に力を込めて応戦する。

かつてファンガイアと人間の隔たりを無くすために命を懸けた男がいた。

その男はファンガイアの女性と結ばれるため……ファンガイアと人間が共存する世界”を作るためにファンガイアの王の鎧を……。現在ワタルが装着している“黄金のキバの鎧”よりもはるかに危険な“闇のキバの鎧”を迷うことなく装着した。

唯の人間が……。

本気で世界を変えられると信じそのために命を懸けた人間がいた。

「僕は父さんが作り上げたこの世界を守り抜いて見せる！」

キバは言う。

ワタルの父オトヤはすでに死んでいた。

だが、母であるマヤは生きているためオトヤのことも聞いている。

オトヤはバットファンガイアとの戦いに勝利した。

禁断の自爆技を使ったというのに彼は生きていた。

だが……。その体は“キングスワールドエンド”と“闇のキバの

力”によつて既に滅ぶ寸前だった。
だから、彼は最後にマヤに向かつてこう言った。

「耳かきをしてくれないか？」

マヤは静かに頷いた。

そして、この世界の創始者であるオトヤの人生は終わりを告げた。
そして、ワタルはそんなオトヤの息子だ。

「僕は皇帝だ！国民を救う義務がある！父さんが作り上げたこの世界を守る義務がある！だから・・・僕は負けられない！！」

「ああ・・・どうして俺たちは戦わないといけない？本当にどうして・・・？俺たちはただ、世界を救いたいだけなのに」

二人の剣は激しくぶつかり合う。

すでに二人ともお互いの斬撃を幾つかくらっておりいつ倒れてもおかしくない状態だった。

だが二人は戦う。

「どうしてあなたは破壊者なんですか？どうして僕はあなたと・・・」

キバは叫ぶ。

違う出会いをしていればきつともっと違う未来を送っていたであろう。

だが、この出会いを送ってしまった。

破壊者と皇帝としての出会いを・・・。

「どうして俺は破壊者なんだ？どうして俺はお前と・・・」

ディケイドは叫ぶ。

自分でもおかしいことを言っていると思った。

破壊者の力を振るいながら自分が破壊者だということに納得がいていないのだから。

本当はすぐにでも剣を収めキバによつて斬られたかった。

だが、彼は死ぬことを許されていない。

彼が死んで旅が終わりを告げれば同時に彼の世界の終りまで告げてしまうから。

そして、二人は戦闘中には矛盾しているであろう言葉を同時に行った。

「「戦わないといけない？」」

ディケイドとキバは剣を振るう。

二つの剣はぶつかった。

その瞬間二人の想いを乗せた剣は大きな音とともに二人の手を離れた。

「しまった」

「決着を・・・つけさせてもらいます」

キバはフェッスルをキバットに吹かせた。

【ウェイクアップ！】

だが、ディケイドは必殺技を使えない。

彼の力の源ともいふべきライダーカードはライドブッカーとともに

彼の手を離れてしまったから。

この瞬間勝負は決した。

キバは構えてからジャンプ・・・できなかった。

勝者は仮面ライダー・・・ディケイドだった。

ジャンプに失敗したキバはワタルの姿に戻って地面に倒れる。

「ワタル!？」

サイガは変身を解いてワタルに近寄った。

「僕の負けです・・・でも、お願いです！世界を破壊しないでください！！父さんと僕の夢を破壊しないでください」

ワタルは呟くようにサイガに訴えた。

サイガは自分でもわからないうちに涙があふれていた。

「約束する・・・この世界は破壊しない！！だから、お前も生きる！この世界と一緒に」

サイガは涙交じりの声でそう言う。

本当は自分が死ぬはずだった。

だが、時間がそれを許さなかった。

ワタルの人間としての部分は耐えてくれなかった。

「あなたは・・・破壊者のくせして随分と優しいんですね・・・」

それが最後の言葉。

ワタルは笑顔で逝った。

「貴様あ！！！」

ケイスケはサイガに殴りかかったが再びタイガに止められる。

「お前！！！！弟が死んだんだぞ！！あいつに殺されたんだ！」

「それもワタルの意思だった！！！！！」

ケイスケの怒りの声をタイガはさらに大きな声で抑える。

ワタルが一人で戦うといったときからこんな未来もある。

タイガはそう思っていた。

タイガは静かにワタルをお姫様抱っこすると椅子に座らせた。その光景はまるで眠っているかのようだ。

ワタルは最後まで皇帝として死んでいった。

「俺が振り向くまでにこの世界から出ていけ！さもなくば・・・俺がお前を倒す」

タイガはワタルを座らせてワタルを見ている状態でそう言う。

確かにワタルが・・・弟が死ぬという未来があるとは思っていたし覚悟もしていた。

だが・・・その覚悟がいつまでもつかタイガにもわからない。すると、ディケイドライバーが光ってオーロラが現れる。

「俺は……旅をしなくてはいけない」

サイガはまるで自分自身に言うかのように独り言を言つとオーロラを潜った。

そのオーロラには『仮面ライダー龍騎』のマークが映っていた。

『キバの世界・・・皇帝』（後書き）

次回予告

次の世界に旅立ったサイガは鏡の中で戦うライダーを見つける。そこでサイガは龍騎に変身する赤土シンジとナイトに変身する高炉レンとゾルダに変身する西条シュウイチに出会う。彼らと共に戦ったサイガはシンジと仲良くなるがほかの二人は・・・。

次回

『龍騎の世界・・・友情』

『龍騎の世界・・・友情』（前書き）

今回のサイガはやつと破壊者としてではなく進藤サイガとして見られる・・・はずだった。

『龍騎の世界・・・友情』

【龍騎の世界】

ミラーワールド・・・それは鏡の中に存在し、左右反転されている以外は現実世界とそっくりだが、モンスターやミラーワールドの住民以外は存在しない世界である。

その世界で現在四人のライダーが戦闘を行っていた。

「貴様あ!!!!よくも足由を殺したなあああ!!!!」

「ふんっ!弱いやつが悪いんだ」

「貴様あ!」

四人のうちの一人で赤い仮面ライダー、龍騎はドラグセイバーという剣で紫色のライダー、王蛇に斬りかかったが王蛇はベノサーベルで龍騎の猛攻を止めると龍騎を蹴り飛ばした。

だが、龍騎を蹴り飛ばした瞬間王蛇は銃撃をくらったのけぞる。

「お前の相手は一人じゃないぜ」

「おもしれえ」

王蛇は自分を撃った緑色をしたライダー、ゾルダに斬りかかったが紺色のライダー、ナイトが王蛇をダークバイザーで斬った。

「お前だけは許せない・・・よくも仲間を殺してくれたな!!」

ナイトは王蛇を怒鳴りながら王蛇を斬っていたが王蛇はダークバイザーをつかむ。

「なに言ってるんだよ。ライダーは戦わないといけないんだぜ」

「俺たちは戦う気はない！！」

王蛇の言葉に龍騎は強く反論する。

この世界には13人のライダーが存在する。

そして、彼らが戦い合い最後の一人になったものは願いが叶うとされていた。

また、この世界には先ほども言ったようにモンスターという怪物が存在していた。

モンスターは人間を食料としているがライダーはそのモンスターと契約することによって力を得る。

また、モンスターを倒すことによって自身が契約しているモンスターを強化させることも可能だ。

ライダーは基本的に人間を守るためではなく自分の契約しているモンスターを強化させるためにモンスターを倒す。

他のライダーを倒して願いを叶えるために。

だが、その中で四人だけライダーとしての力をモンスターから人間を守るために使おうと誓った青年たちがいた。

それが現在戦っていて龍騎に変身する赤土シンジとナイトに変身する高炉レンにゾルダに変身する西条シュウイチである。

後一人ライアに変身する足由ミュキという青年もいたが彼はライダー同士の戦いに巻き込まれ死んでしまった。

ミュキを殺した者の名前は獄寺タケシ……現在彼らと戦ってい

る王蛇だった。

偶々獄寺を見つけたシンジ達はミユキの敵をとろうとしているのである。

【トリックイベント！】

ナイトがカードをダークバイザーに装填するとナイトの姿は三人になって王蛇を斬りつけた。

「赤土いまだ！」

「おう！」

【ファイナルベント！】

龍騎はカードを装填した後構えると空中に飛び上がった。

そして、自身が契約している龍型モンスターであるドラグレッダーの火球を受けながらナイトの斬撃でふらついていた王蛇にとび蹴りした。

「はああああああ！！！！！！！！」

「くそがあ!!!」

王蛇はその場で爆発した。

「敵はとつたぞ……ミユキ」

三人が戦いが終わったことに一息をついていると突然王蛇の契約モ

ンスターでありヘビの姿をしたベノスネーカーが三人に襲い掛かってきた。

「くそ・・・やばいぞ！あまり時間がない」

「さっさと片付けるぞ」

レンとシュウイチは若干焦った様子でベノスネーカーと戦い始める。

ライダーは9分55秒以上ミラーワールドに滞在すると消滅してしまふ。

王蛇との戦いであまり時間がなかった。

サイガはある店のショーウィンドーを見ていた。

「やはりここは龍騎の世界か……」

サイガの目の前では鏡の中で三人のライダーがベノスネーカーと戦っているが苦戦しているうえに体が消滅しかけていた。

「変身！」

【カメンライド・・・ディケイド！】

サイガの周りにシルエツトが現れそれらがサイガに重なるとサイガの姿はディケイドになった。

ディケイドは右手をゆっくりとショーウィンドーに当てる。
すると、ディケイドはショーウィンドーに吸い込まれていった。

「くそ！！」

龍騎はドラグセイバーでベノスネーカーに斬りかかったが尻尾でふり払われた。

「ぐわあ!!」

更にベノスネーカーは龍騎に毒液を吐き出した。

「しまった!？」

「「赤土!!?」」

ベノスネーカーと戦っていたナイトは龍騎に駆け寄るが間に合いそうもなくゾルダは毒液を撃ったが効果が無かった。

だが、その瞬間ディケイドが龍騎の前にジャンプしてきた。ディケイドはカードを装填する。

【アタックライド・・・バリア!】

すると、ディケイドと龍騎の前にバリアが現れて毒液を防いだ。

「間一髪だったな・・・」

「誰だお前は？」

龍騎は突然現れた戦士に驚きながら聞く。

「通りすがりの仮面ライダーだ」

ディケイドはそう言うとともにカードを装填した。

【フォームライド・・・キバ・ガルル!】

電子音声とともにディケイドの姿は仮面ライダーキバ・ガルルフォ

ームになった。

Dキバはベノスネーカーが吐き出してくる毒液をかわしながらジャンプするとベノスネーカーの頭の上に飛び乗る。

「はあああああ！！！」

そのままDキバはガルルセイバーでベノスネーカーの頭を斬りまくった。

「ギョアアアアア！！！！！」

ベノスネーカーは吠えながら頭を振る。

Dキバはガルルセイバーをベノスネーカーの頭に刺すとカードを二枚装填して地上に降りた。

【カメンライド・・・キバ！】

【ファイナルアタックライド・・・キキキキバ！】

Dキバの姿がガルルフォームからキバフォームに変わると瞬時に右足のヘルズゲートが開く。

Dキバは飛び上がると頭の激痛に暴れまわっているベノスネーカーにとび蹴りをした。

Dキバの必殺技【ダークネスムーンブレイク】を受けたベノスネーカーは爆発した。

龍騎たちはデイケイドに話しかけようとしたが残った時間が少なすぎたので急いで元の世界に戻る。

デイケイドも彼らを追って元の世界に戻って行った。

「さっきは助けてくれてありがとう！俺は赤土シンジ。君は？」

元の世界に戻るとシンジはサイガにお礼と自己紹介を始めた。

「俺は進藤サイガ」

サイガも自己紹介をする。

だが、サイガの表情は険しかった。

シンジの後ろにいる二人の視線が厳しかったのだ。

「（この世界も俺は破壊者として知られているんだろうか・・・？）

」

サイガがそんなことを思っているとシンジがサイガの肩を叩いてきた。

シンジはサイガが破壊者だと知らないのか笑顔である。

「飯行こうぜ飯！戦ったら腹が減ったよ！レンとシュウイチも行くだろ？」

「「あ・・・ああ」」

二人はあいまいな返事をしたがシンジはそれで満足らしく四人は近くにあったラーメン屋に寄った。

それぞれの注文したラーメンが並びシンジが箸を割った瞬間レンがサイガの方を見ながら「この世界に何の用だ？破壊者」と言った。

「! ?」

それを聞いた瞬間サイガは悲しそうな表情になる。

それを知っていることはまた戦わないといけないことだからだ。

だが…… たった一人サイガの予想を超える人物がいた。

「やめろレン！」

シンジがラーメンを食べながらそう言ったのだ。

まるで食事中は静かにしろとも言っているかのようになつた態度で。

それに反応したのはシュウイチだった。

「お前も気づいているだろ？こいつを倒さないと世界が滅びるんだぞー！」

「それがどうした？」

「？」

シンジの言葉にシンジ以外の三人は驚く。
一番驚いているのはサイガだった。

自分が否定されていない。

このことはサイガにとってかなり大きなことだ。

シンジは食事を止めてレン達の方を向く。

因みに席は左からシュウイチ レン シンジ サイガである。

「サイガは俺たちを助けてくれた。俺はこいつが破壊者だとは思えない」

「シンジ……」

サイガは信じられないものを見ているかのようにシンジを見る。
だが、レンはその態度に激怒した。

「甘いぞシンジ！ たった一度助けられただけでこいつを信用するのか？ 良いか？ 俺たちは命がけの戦いをしているんだぞ！ そう簡単に人を信じても良いのか？」

幸いほかに客がいなかったため店員に止められることなく話が進む。
シンジはレンの言葉を聞いてものんきにラーメンを食べていた。
チャーシューをうまそうに食べるとシンジは口を開く。

「なあレン……命がけの戦いをしているからこそ人を信じることを忘れちゃいけないんだよ！ もし、人を信じることを忘れたら俺たちは人間を守れなくなるだろ？ 俺たちが人を信じることを忘れたらだれがモンスターから人々を守るんだ？」

「お前がそこまで言うなら信じてやる……」

シンジの言葉を聞くと怒りが収まったのかレンは水を一気飲みして

ラーメンを食べ始めた。

シュウイチも何も言うことが無いのかラーメンを食べる。

「お前……」

サイガは呆然としていた。

自分を信じてくれているのだ。

世界を破壊しないと。

シンジはサイガの方を見ると微笑んだ。

その瞳には疑っている様子もなかった。

「ラーメン食わないなら俺が食っちまうぞ」

シンジにそう言われてサイガはラーメンの存在を思い出し急いで食べ始める。

「熱い~~~~!!!!?」

「ほれ水!」

ラーメンを食べ終わると外が暗くなってきたため四人は解散した。

サイガが今日泊まるホテルを捜していると突然後ろから声をかけられた。

その瞬間サイガの表情は暗くなる。
意を決して後ろを向くとそこにはレンとシュウイチがいた。

「何の用だ？ラーメンの代金は払ったはずだが？」

サイガはわざと明るいい声でそう言ったが心の中では最悪の結果を想像していた。

「赤土はお前を信じているようだがやはりお前には死んでもらう！」

「この世界を破壊されるわけにはいかないからな……」

二人はそう言うときカードデッキを近くの鏡に映した。
すると、鏡に反射するように二人の腰にはVバックルが現れる。

この世界のライダーと戦うこと。

それはサイガの考えていた最悪の結果だった。
そして、今の状況は……その最悪の結果である。

「くそっ……」

サイガは歯を食いしばるとディケイドライバーを取り出して腰に装着した。

ゆっくりとライドブッカーからカードを取り出す。

まるで誰かがこの戦いを邪魔してくれることを望んでいるかのようにゆっくりとカードを構えた。

だが、誰も来なかった……。

「本当に……戦うのか？」

サイガは最後の忠告をした。
わずかな望みにかけて……。

「さっさと始めよう」

「俺たちの手で消してやるよ。この破壊者!!」

望みは碎け散った……。

サイガは戦う覚悟を決めた。

戦わなければ生き残れない……。

「「「変身!!!!」」」

「はあ!!!!」

ディケイドはライドブッカー・ガンモードでゾルダを撃った後ライドブッカーをソードモードにしてナイトを斬った。

「くそ……破壊者を名乗るだけのことはあるな」

「いつ俺が名乗った？」

ナイトはダークバイザーでディケイドに反撃するがディケイドはライドブッカーで防ぐ。

「これでもくらえ！」

ゾルダはマグナバイザーでディケイドを撃ったがディケイドはかわしその銃撃はディケイドと戦っていたナイトが受けた。

「ぐああああ!!」

【アタックライド……ブラスト!】

ディケイドはカードを装填し強化された銃撃をゾルダに食らわせた。

「ぐっ……!!?」

ゾルダは腕を交差して防いだが光弾の数が多く後ろに吹き飛ぶ。

【アタックライド……スラッシュ!】

ディケイドはさらにカードを装填してナイトを強化された斬撃で斬った。

「がはっ・・・・・・・・!!?」

ディケイドスラッシュをもろ受けたナイトはゾルダと反対側の方に吹き飛ぶ。

「もう終わりにしないか？」

ディケイドはライドブッカーをブックモードの形に戻して腰に装着すると自分の左右にいるナイトとゾルダを交互にみながらそう言う。これ以上無駄な争いはしたくなかった。

これ以上人を殺したくなかった。

「ふざけるなああああ!!! シュウイチ！」

「ああ！」

二人はデッキからカードを取り出すと同時にバイザーに装填した。

【【ファイナルベント!】】

空からはコウモリ型モンスターであるダークウイングが地面からはバツフロア型モンスターであるマグナギガがそれぞれ現れる。

ナイトはウイングランサーを持つとダークウイングと合体して空中に舞いあがった。

ゾルダはマグナバイザーをマグナギガの背中に接続してマグナギガの全砲門を開かせる。

「バカ野郎」

ディケイドは一言つぶやくとカードを装填した。

【アタックライド・・・インビジブル！】

「なに！？」

ディケイドの姿は一瞬で消えてしまった。
だが、一度発動した技は止められない。

ナイトはダークウイングが変化したマントであるウイングウォールを自身の体にドリル状に包むとその場にたったひとりだけいるほかの存在めがけて急降下していく。

仮面ライダーゾルダに向かって。

「くく来るなあああ！！？」

ゾルダは驚いてマグナバイザーの引き金を引いてしまった。

その瞬間マグナギガの全身にある大量のミサイルやレーザーは一斉射撃した。

ゾルダの必殺技である【エンドオブワールド】は必殺技である【飛翔斬】を行っている途中のナイトに直撃したがそのドリルはそのままゾルダに当たり爆発した。

赤土シンジは自宅のインターフォンを鳴らされる音で目が覚めた。
サイガたちと別れた後明日の仕事もあるため早めに寝ることにしたのだ。

「はいはい、どちら様ですか？」

眠い目をこすりながらドアを開けたシンジだったが来訪客を観た瞬間眠気は吹き飛んだ。

血まみれのレンとシュウイチがそこにいた。

「おい、大丈夫か！？何があった？」

シンジは急いで二人の体を揺するが二人とも意識がもうろうとしているのかとぎれとぎれにしゃべった。

「ディケ……イド……やつは……あく……ま……

だ」

「デイクイド・・・サイガのことか？まさか・・・あいつにやられたのか！？」

レンの言葉に信じられない様子のシンジが聞くがレンは瞳を閉じたままだった。

「おれ・・・た・・・ち・・・の・・・かた・・・きを・・・とって・・・くれ」

シュウイチもそう言うのと静かに目を閉じシンジに頼むようにしていた腕もだらりと下がった。

「うわあああああああ！！！！！！！！」

シンジはその場で叫んだ。

ついこの前仲間だったミユキが殺され今日やっとその敵をとったというのに今度は残った二人の仲間を同時に失ってしまった。

「信じていたのに・・・」

シンジは呟くようにそう言う。

もう目を開けることがないであろうレンとシュウイチの顔には雨も降っていないのに雫がぼつぼつと落ちてきた。

「許さないぞ・・・サイガ・・・」

怒りの炎を燃やしたシンジはまた呟くようにそう言う。

「許さないぞおおおおお！……！！！！！！！！！！」

シンジは叫ぶとそのまま走り出した。

二人の復讐をするために……。

二人の間に芽生えた友情は一日と持たず激しい憎悪のもと砕け散つた。

『龍騎の世界・・・友情』（後書き）

次回予告

仲間を殺された恨みと憎しみで復讐鬼と化したシンジはサイガを捜して走り回る。また、同じころサイガはレンとシュウイチがどうなったか不安になっていた。そして、再び出会う二人・・・。二人が死んだと聞かされ悔しい思いをするサイガにシンジは容赦なく殴りかかる。

次回

『龍騎の世界・・・憎悪』

『龍騎の世界・・・憎悪』（前書き）

サブタイトルの意味はあまりありません。

本当はシンジはサイガを憎んでいる状態にしようと思ったのですが
やはりシンジはお人好しということでした。

『龍騎の世界・・・憎悪』

「何処にいる？何処にいるんだ？サイガ！！」

シンジは走っていた。

友人の敵をとるために。

進藤サイガを殺すために。

「はあ・・・はあ・・・見つからない・・・くそう！」

シンジは一度止まると苛立ちのせいか近くの家の煉瓦を思いっきり殴った。

「お困りのようだね。赤土シンジ君」

シンジが煉瓦に両手を当てて下を見ながら呼吸を整えると背後から声が聞こえた。

その声には聞き覚えがあった。

「（確か・・・俺たちがライダーの戦いに巻き込まれているときに何処からともなく聞こえた声だったか？）」

まだミユキが獄寺に殺される前シンジたちがモンスターと戦っていた時に突然仮面ライダータイガとインペラーが現れて自分たちに戦いを挑んできたことがあった。

シンジの背後から聞こえた声はその時に何処からともなく聞こえた声だった。

もうすぐこの世界に破壊者が現れる・・・破壊者の名はディケイ

ド・・・ディケイドを倒さなければこの世界は滅ぼされるであろう・

それがその時に聞こえた声の内容だった。

シンジが後ろを向くとそこには眼鏡とコートにフェルト帽が特徴の
壮年の男がいた。

「私の言った言葉は覚えてくれているかな？」

壮年の男は言うとしんじはゆっくりと頷いた。
それを確認すると男はさらに続ける。

「まだ世界は滅びてはいないが仲間を殺されてしまったようだね。
だから言っただろう？ 奴は破壊者だと」

「サイガはどこにいる？」

男がしゃべり終わると同時にシンジは男に質問する。

男の口ぶりから現在サイガがどこにいるのか知っているような気が
したのだ。

男はそれを聞くと口元を不気味に歪めた。

「彼をどうする気かな？」

男はどこか楽しそうにそう聞いてきた。

サイガを見つけてどうする・・・・・・？

シンジの心の中ではすでにそんなこと決まっていた。

「レンとシュウイチの敵をとる！！あいつを……殺す！！！」

シンジは男をにらみながらそう言い放った。

すでにシンジの心の中にはサイガを信じたいという思いは消え去っていた。

それを聞くと男は先ほどよりも大きく口元を歪める。

まるで自分の願いが叶ったかのように。

「彼はこの先にある公園にいる。ディケイドを殺すんだ」

男はそう言ったがシンジはサイガが公園にいるという情報を聞き次第走り去ってしまい「ディケイドを殺すんだ」という言葉はシンジの背中に浴びせられた。

「ククク……ハハハハ！！！！」

シンジが去ると男はおかしそうに笑い出した。

男が笑い出すとほぼ同時に男の背後には灰色のオーロラが現れる。

「これで貴様の最期だディケイド……いや、進藤サイガ」

その男……鳴滝はそう言い捨てると後ろに下がりオーロラを潜った。

「出るよ！！頼むから出てこいよ……………」

シンジと鳴滝が話をしていた頃サイガは公園のベンチでディケイドライバーを握りしめながら叫ぶように言葉を発していた。

「なんでだよ……………」

サイガはがつくりとうなだれながらもディケイドライバーを見る。

サイガは灰色のオーロラが出現するのを待っていた。

レンとシュウイチがどうなったのかは知らないがもしかしたら…………

……そんな思いがサイガには合った。

だが、サイガはそれを受け入れたくなかった。

もし、彼らが生きていれば必ず自分を捜しだし再戦を挑んでくることだろう。

だから、一刻も早くこの世界を出ていき次の世界に行きたかった。

二人が生きていると信じているからこそ…………。

すると足音が聞こえてきた。

誰かが走っているのだらうとても激しい足音だ。

その足音は段々近くなってきた。

「見つけたぞ……………」

サイガが顔を上げるとそこには唯一自分を信じてくれた人がいた・・・はずだった。

「シンジ・・・！？」

次の瞬間ベンチに座っていたサイガの世界は周りだしシンジを見ていたサイガの瞳は空を見ていた。

サイガはゆつくりと右手で自分の頬に触れた。

左の頬が痛かった・・・。

シンジはサイガを殴った。

「レンとシュウイチが死んだ・・・お前が殺したんだろ！？」

シンジはサイガを見下しながらそう叫んだ。

その言葉にはラーメン屋の時の優しさの代わりに明らかな殺意が込もっていた。

サイガはゆつくりと立ち上がり再びシンジの顔を見る。

受け入れるしかなかった・・・。

レンとシュウイチは死んだ。

サイガはその事実を受け入れるしかなかった。

「ああ・・・」

今にも消えそうな声でサイガはそう言う。

自分が戦線離脱したために彼らは死んだのだから・・・。

シンジは再びサイガを殴ろうとしたがその拳は寸前で止まった。

「俺と戦え!!」

「断る!」

拳をおろしシンジは叫ぶようにそう言ったがサイガは瞬時に拒否の意思を表した。

だが……それぐらいでシンジは止まらなかった。

シンジはその場を去ると道路にあるミラーにカードデッキをかざした。

デッキが反射されるとVバックルがシンジの腰に現れる。

それを確認するとシンジはサイガのもとに戻ってきた。

「どういっつもりだ?」

「こっいつつもりだ。変身!」

サイガの質問に返事を返すとシンジはカードデッキをVバックルに装填した。

その瞬間シンジの姿は龍騎になる。

龍騎はそのままサイガに殴りかかってきた。

「なっ!?!」

サイガは何かぎりぎりのところでかわし龍騎から離れるとディケイドライバーを構える。

「俺と戦え……それともこのまま死ぬか?」

「くそ……変身!!」

サイガはディケイドライバーを腰に装着するとカードを装填した。
死ぬわけにはいかなかった。

自分が死ねば自分の世界が滅びるのだから……。

【カメンライド……ディケイド！】

電子音声とともにサイガの周りにはシルエットが現れる。

シルエットはサイガに重なりバックルから出現したプレートが頭に刺さるとサイガの変身は完了した。

仮面ライダーディケイド。

それはシンジにとって信じたい存在であつたが今は自分を裏切り仲間を殺した破壊者……悪魔の姿だった。

龍騎とディケイドは先ほどシンジがカードデッキをかざしたミラーに飛び込みミラーワールドに突入した。

「はあああああ……！！！」

龍騎はドラグセイバーを振るうがディケイドはライドブッカーをソ

ードモードにして軽く防ぐ。

龍騎は何度も何度もドラグセイバーを振るうがディケイドはそれらを全て受け流した。

「くそー!!!」

攻撃が当たらないことに苛立ちを隠せないでいた龍騎はドラグセイバーを持つ右手を高く振り上げた。

だが、その瞬間ディケイドは龍騎を蹴り飛ばす。

振り上げられたドラグセイバーは振り下ろされることなく龍騎は吹き飛んだ。

「今のお前じゃ俺には勝てない」

ディケイドは龍騎にそう言い放つ。

その言葉は自惚れや龍騎を見下しているのではなく事実だった。

現在の龍騎は仲間を殺されたことにより我を失っている状態である。そのため龍騎はディケイドを殺すことに集中しすぎてディケイドの動きを見ることが自分のスタミナを考えることもしないのである。しかも、ドラグセイバーを振るう太刀筋はその怒りにより滅茶苦茶になっていた。

いわば、龍騎はドラグセイバーを“振る”のではなく“振り回している”状態なのである。

その上ディケイドにより多くのダメージを与えることを考えているためか剣を必要以上に大きく振るうので対処するのもいくらか楽だった。

「はあああああああ!!!!!!」

龍騎はすぐに起き上がりディケイドに向かってドラグセイバーを振るう。

ディケイドはそれをバックステップでかわすとライドブッカーをガンモードにして龍騎を撃った。

だが、光弾が命中したにもかかわらず龍騎はそのままディケイドに襲い掛かりドラグセイバーでディケイドを斬った。

「ぐっ……!!?」

必要以上に大きく振られたことによってその斬撃の威力は高くディケイドは龍騎から間合いを広げようとした。

だが、龍騎はすぐに間合いを詰めディケイドを斬りまくる。

「いい加減にしろ!」

ディケイドはそう言うドラグセイバーを左手で防ぎ右手で龍騎を殴る。

その衝撃で龍騎はドラグセイバーを離して吹き飛びドラグセイバーはディケイドの手に渡った。

ディケイドはドラグセイバーを投げ捨てると龍騎の方を見る。

「やるじゃねえかよ……サイガ」

殴られてたことによって冷静さを取り戻したのか龍騎からは先ほどまでの荒々しさが消えた。

ドラグセイバーはすでに手の中に無い為龍騎は拳を構えるとディケイドに殴りかかる。

ディケイドもライドブッカーをブックモードにして腰に戻すと拳を構えて応戦する。

「なあ、サイガ……本当に前が二人を殺したのか？」

龍騎はディケイドからの攻撃をかわした後ディケイドにパンチをし
ながら聞く。

「……そうかもしれないな」

ディケイドは龍騎のパンチを左手で防ぐとそのまま龍騎に回し蹴り
をした。

二人が死ぬところをサイガは見えていなかった。

そして、二人が死んだのならその原因は………お互いのファ
イナルベントをくらったからであろう。

それはサイガが殺したということになるのかもしれないし二人が自
爆したということになるのかもしれない。

だが、少なくともサイガの……ディケイドの存在が二人の死を
招いたというのは事実だった。

少なくともサイガはそう考えていた。

だからこそ反論せずに受け入れる。

「なんでだよ………」

龍騎は呟く。

もしかしたら何かの誤解があったのかもしれないと思っていた。

例えば二人はまだいる13人のライダーのうちの誰かに不意打ちを
くらいそこにたまたまサイガがいたとか………そんなことをシン
ジは希望に思っていた。
だが、サイガは認めた。

「何でだよ!!」

龍騎はディケイドの回し蹴りを左手で防いだ状態でそう叫ぶと右手の拳を握りしめてディケイドの体を思いっきり殴った。そのあまりの威力の大きさにディケイドは後ろに吹き飛ぶ。龍騎はデッキからカードを取り出すと後ろにジャンプしバイザーに装填した。

【ストライクベント！】

龍騎の右腕にドラグクローが装備される。

それと同時に龍騎の背後にはドラグレッダーが出現する。

「はあああああ・・・」

龍騎は右腕を後ろに下げ構える。

信じていたのに・・・。

さっきの質問は龍騎のディケイドを信じる最後の希望だったが、希望は絶たれた。

彼は・・・二人を殺した。

「セイヤア！！！」

龍騎は下げていた右手を突きだした。

同時にドラグレッダーが火球を発射する。

ディケイドは瞬時にカードを取り出してバツクルに装填した。

【アタックライド・・・スラッシュ！】

ディケイドはライドブッカードをソードモードにすると構えて火球を斬った。

その瞬間辺りは爆発した。

「はぁ・・・はぁ・・・終わったか？」

龍騎はドラグクローを外して爆発を見る。

その体は制限時間により消滅しようとしていた。

【アタックライド・・・ブラスト！】

【ガードベント！】

爆発が収まるとディケイドは立っておりガンモードの状態のライドブッカードを龍騎に向け引き金を引く。

同時に無数の光弾が龍騎めがけて飛んできた。

だが、龍騎もディケイドの姿が見えた瞬間にカードを装填し何とかドラグシールドを二枚持ちディケイドブラストを防ぐ。

光弾が止むと二人は同時にカードを装填した。

【ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド！】

【ファイナルベント！】

ディケイドは十枚のカード型エネルギーを潜って……。

龍騎はドラグレッダーの放つ火球をその身に受け……。

二つのとび蹴りは空中で激突した。

「ぐわあああああ！！！！！！」

二人は同時に地面に落下する。

ディケイドと龍騎は立ち上がると同時にお互いを殴った。

「終わりにしよう……お前はもう限界だろう」

ディケイドは肩で息をしながら龍騎にそう言う。

ディケイドが龍騎にそう言ったのは体力の問題もあるがもう一つ……
・・時間の問題だった。

龍騎たちは9分55秒以上ミラーワールドにいと消滅する。

自分はどうか知らないが好き勝手にミラーワールドに来られるところを見る限り希望はあった。

現に龍騎の体は消滅しかけているがディケイドに異常はない。

だが、龍騎はゆっくりと首を横に振った。

その瞬間……龍騎の腰にあるカードデッキは砕けた。

「シンジ!？」

ディケイドは変身が解け倒れかけたシンジの両肩をつかんで支えた。
ミラーワールドに9分55秒滞在できるのはあくまでライダーだった。

シンジの体はみるみる消滅していく。

「おい、シンジ!？シンジ!！」

ディケイドは叫ぶ。

もうどうしようもなかった……。

「サイガ……今度会ったらまたラーメン食おうぜ」

「!？」

シンジはそう言うつと消滅した。

彼は笑顔で消滅していった……。

「あ……うあ……が……」

ディケイドは言葉を失った。

叫ぶことすらできなかった。

また一人、彼の目の前でライダーは死んだ。

近くの鏡から出てきたディケイドは瞬時にサイガの姿に戻ると倒れた。

辛い……。

サイガは旅することが辛かった。

旅することに目の前で死ぬライダーたち。

サイガはディケイドライバーを目の前に持つてくる。

すぐにでもこのベルトを捨てたかった。

だが、これを捨てれば……旅を放棄すれば自分の世界は滅びる。

「くそう!!」

サイガが叫ぶと同時にディケイドライバーが光だしオーロラが現れた。

その瞬間サイガは呆然とする。

「なんでだよ……」

サイガはシンジと戦う前に公園でオーロラが出現するのを待っていた時と同じ言葉を呟く。

だが、前はオーロラが現れないため呟いたのに対し今回はオーロラが現れたため呟いていた。

「あいつと戦う前に出てきてくれれば……あいつは……シンジは死なずに済んだのにさあ!!何で今頃出てくるんだよ!!」

サイガはディケイドライバーを見ながら叫んだ。
だが、ディケイドライバーは生物でなければしゃべることもできない。

サイガの叫びはすっかり暗くなった夜道に吸いこまれるように消え去った。

サイガはゆっくりと立ち上がるとオーロラを見る。

オーロラには『仮面ライダーブレイド』のマークが映っていた。

サイガは一分以上オーロラを見つめていると決心したようにオーロラを潜った。

潜らなければならなかった……。

「俺は……絶対に俺の世界を救って見せる」

すでに三人以上の命を背負ったその目的のために……。

『龍騎の世界・・・憎悪』（後書き）

次回予告

『ブレイドの世界』を訪れたサイガは人間を襲っているアンデットを発見し戦う。

だが、戦っている途中に三人のライダーが乱入しアンデットを封印する。彼らはディケイドの存在を知らなかった・・・。

次回

『ブレイドの世界・・・運命』

『ブレイドの世界・・・運命』（前書き）

今回はあの男がこの世界のライダーを・・・。

『ブレイドの世界・・・運命』

【ブレイドの世界】

サイガは道を歩いていた。

自分はまた旅を続けている・・・。

今の状況に後悔が無いと言えば・・・完全な嘘になる。
後悔ばかりなのだ・・・。

「俺はこの世界で一体何をやれば良いんだろうね・・・」

「・・・きゃあああああ！！！！？」

サイガがぼつりとつぶやいた瞬間多くの人の悲鳴が聞こえてきた。
サイガが悲鳴のした方向に向かって走るとそこではジャガーに似た怪物、ジャガーアンドットが人を襲っていた。

サイガはディケイドライバーを構えると腰に装着しカードを持つ。

「俺は・・・誰かを守るためにこの力を使いたい！！変身！」

サイガは自分の世界を救うためとはいえ三人以上の命を失わせてしまったことを想いながら“破壊する”為ではなく“守るために”この力を使いたいとまるで自分に言い聞かせるかのように言った後カードをディケイドライバーに装填した。

【カメンライド・・・ディケイド！】

シルエットとプレートが重なりディケイドに変身したサイガは人を殴ろうとしていたジャガーアンドットのこぶしを受け止めてジャガ

ーアンデットを蹴り飛ばす。

そのままライドブッカーをソードモードにしてジャガーアンデットを斬りまくっていきとどめを刺そうとカードを装填しようとした瞬間……。

【KICK! THUNDER! … LIGHTING BLAST!】

そんな電子音声が聞こえたと思ったらカブトムシに似た銀色の装甲の戦士がジャガーアンデットに電撃を帯びたキックを放った。

銀色の装甲の戦士、仮面ライダーブレイドはジャガーアンデットに“ライトニングブラスト”と呼ばれる必殺技が命中したのを確認するとカードをジャガーアンデットに投げる。

すると、ジャガーアンデットはそのカードに吸い込まれるようにして消えた。

「剣時さん!」

「剣時!」

更にクワガタに似た銀色の装甲の戦士、仮面ライダーギャレンとクモに似た金色の装甲の戦士、仮面ライダーレンゲルがこちらに寄ってくる。

「怠谷^{だいや}さん! ムツキ!」

剣時と呼ばれた男はこちらに寄ってくる二人に声をかける。

「剣時、アンデットは?」

「先ほど封印しました」

「そうか・・・」

怠谷と剣時が会話を終えると剣時がサイガに気付く。

「そう言えば君は誰なんだ？さっきはついアンデットを倒してしまつたがあんなライダーシステムは見たことが無い」

「俺は進藤サイガだ。あの姿はディケイドと言つて別世界から来た」

サイガはそう言うといつでも逃げられるような体制に入った。
自分がディケイドだと知られたら戦いを挑まれると思つたのだ。

本当は名を名乗らなければ良いとも思つたがディケイドを知っている場合姿も知っている可能性が高い為下手に嘘をついても意味がないのだ。

剣時はサイガの言葉を聞くと感心したような顔をする。

「へえ、別世界からか・・・。あるんだな、別世界って」

「確かに感動です！」

剣時の言葉にムツキが反応する。

「（何・・・？）」

おそらくサイガは怪訝な表情をしていたであろう。

彼らの言い方はまるで“ディケイドを知らない”ように聞こえたのだ。

驚いているサイガに怠谷が声をかけてきた。

「サイガ、もしよかったらアンデットを封印するのを手伝ってはくれないか？あの力は頼りになる」

その瞬間確定した。

彼らはディケイドの存在を知らない。

サイガはそのことに驚きながらも少し考える。

もしこの世界のアンデットを全て封印すればこの世界での役目を終えて次の世界に行ける。

つまり、誰も殺さなくても良いかもしれない。

「ああ、手伝おう」

「本当か！？」

サイガの言葉を聞くと怠谷は嬉しそうに笑った。

「よっしゃ！これなら残りのアンデットもすぐに封印できるぜ！おっと、忘れてた。俺の名前は剣時力ズマだ。よろしくなサイガ」

剣時（以後力ズマ）はサイガに握手を求めてサイガに応える。
それに続いて残りの二人も自己紹介を始めた。

「俺の名は怠谷サクヤだ」

「俺は倉無ムツキくらむすきって言います」

二人の自己紹介が終わるとサイガは怠谷（以後サクヤ）とムツキと

も握手をした。

「じゃあ、悪いが説明してくれないか？」

サイガは少しでも情報が欲しい為そう聞くとサクヤが説明してくれた。

サクヤの説明によるとこの世界は四年前に一度すべてのアンデットを封印したのだが一月前に自分たちの知らなかったもう一人のジョーカーに多くのアンデットの封印を解かれたという。

そのジョーカー、アルビノジョーカーはすでに倒したが奴が封印を解いたアンデットはまだ存在し現在そいつらを再び封印しているのだという。

「一応簡単に言つとそういう状況だ」

サクヤの説明が終わるとサイガもこの世界の状況を理解し「そうかとだけ言っ」

四人がそのまま談笑しているとカズマの携帯が鳴った。

「どうした？コタロウ・・・何！？分かった!!」

携帯を切ったカズマはみんなに一言「アンデットが現れたみたいですよ！」と言った。

四人がそこに行くと言に似たエレファントアンデットと狼に似たウルファンデットとウミヘビに似たサーペンとアンデットがいた。

「上級アンデットが三体か……」

「大丈夫ですよ！俺たちは絶対に勝ちます！」

「そうだな」

三体の上級アンデットに表情を苦くしたサクヤだったがカズマの言葉で吹っ切れ四人はそれぞれのベルトを腰に装着する。

そして、サイガはバックル部を閉じカズマとサクヤはバックルのハンドルを引きムツキはバックル部を開いた。

「……変身！……」

【カモンライド……ディケイド！】

【【Turn Up!】】

【Open Up!】

サイガにはシルエットとプレートが重なりカズマ・サクヤ・ムツキは光のゲートを通過してサイガはディケイド・カズマはブレイド・サクヤはギャレン・ムツキはレンゲルに変身した。

そのまま、ブレイドとディケイドはウルファンデットに戦いを挑みギャレンはサーペン・ムツキはエレファントに戦いを挑んだ。

「「はあ！」」

ブレイドとディケイドはブレイラウザーとライドブッカー・ソードモードを使ってウルファンデットを斬っていく。

ブレイドはさらにブレイラウザーでウルファンデットに斬りかけたがブレイラウザーはつかまれた。

「なに！？」

ウルファンデットはそのまま空いている手でブレイドをひっかいた後蹴り飛ばす。

「ぐわあ！？」

その攻撃で倒れたブレイドに向かってウルファンデットはブレイラウザーを投げてきた。

「しまった！！？」

ブレイドはかわせないと思い腕を交差して防御しようとしたが痛みはいつまでたっても襲ってこなかった。

「ぐふつ・・・」

そんな呟きが聞こえたためブレイドが前方を確認するとディケイドがブレイドを庇っていた。

「サイガ！！」

ブレイラウザーは地面に落ちてディケイドは立膝を突く。

「サイガ、お前……俺を庇ったのか？」

「さあな……気づいたら体が動いてた」

ブレイドはうれしくなった。

出会って一日もたっていないがサイガは自分を庇ってくれたんだと・
・その事実が剣時を感動させるには十分だった。

「お前は此処で休んでろ！」

ブレイドはブレイラウザーを拾うとウルファンデットを斬りまくる。
そして、ウルファンデットを蹴り飛ばすとブレイラウザーのオーブ
ントレイを展開して三枚のカードを引き抜きブレイラウザーにラウ
ズした。

「KICK! THUNDER! MACH! …… LIGHTING
SONIC!」

ブレイドはブレイラウザーを地面に突き刺すと超高速で走り空高く
ジャンプした。

「はあ!」

そして、そのまま電撃を帯びた右足でウルファンデットにとび蹴り
した。

“ライトニングソニック”を受けたウルファンデットは大きく吹き
飛んだあと燃えながら腰にあるアンデットバックルが展開する。
ブレイドはラウズカードを投げてウルファンデットを封印した。

「だいじょうぶか？サイガ！」

変身を解いたカズマは同じく変身を解いたサイガを心配して駆け寄る。

自分のせいで攻撃を受けたのだから心配でたまらなかった。

「ああ、大丈夫だ」

サイガはそれに笑顔で答えた。

幸い軽いけがで済んだのだ。

そこに同じく戦いを終えたのであろうサクヤとムツキが現れる。

「こちらは片付いた。そっちも封印したか？」

「はい！サイガに助けられました」

サクヤの言葉にカズマはそう返事をした。

サイガと別れた三人はバイクでそれぞれの自宅に向かって走っていたが突然目の前に灰色のオーロラが現れたため急停止する。

灰色のオーロラからは鳴滝が出てきた。

「君たちは何をやっているのだ？」

鳴滝は突然オーロラが現れたのに加えて人が現れて驚きながらもマシンから降りた三人に突然そう言う。

「どういう意味だ？」

「ディケイドは破壊者だ！彼を倒さなければこの世界は滅びるぞ」

サクヤは突然そんなことを言われた意味が解らないためそう聞いたが鳴滝はディケイドが破壊者だと返事をする。
それにカズマは怒った。

「ふざけるな！彼が破壊者だと？彼は・・・サイガは俺たちと一緒にアンデットを封印したんだぞ」

カズマの言葉に鳴滝は心底おかしそうに笑い始めた。

「なにがおかしいんですか？」

ムツキがそう言っても鳴滝は笑い続けていた。
そして、笑い終わると厳しい目つきを三人に向ける。

「君たちは何を言っているのだ？では聞くが・・・愛善ハジメはどうした？彼も君たちの“仲間”だったろ？」

“愛善ハジメ”この名を言われた瞬間三人はまるで忘れたい思い出を思い出されたかのように辛そうな表情をした。

アンデットが最後まで生き残るとその種族は繁栄する。

これは、かつて行われた“バトルファイト”と呼ばれるアンデット

同士の戦いでアンデットたちが戦う目的だった。

この目的は種族が繁栄するというもの……つまり、ウルファンデットがバトルファイトに勝利した場合地球が“狼の惑星”になるといったように。

だが、例外がいた。

その者がバトルファイトに残った場合すべての種族が減ぶといわれた存在。

アンデットの中でどの種族にも属さないバトルファイトにおいても特別な存在。

それがジョーカー。

カズマ達には昔もう一人仲間がいた。

彼はカズマ達と何度も対立したが次第に心を開いていきやがて自身がアンデットであるにも関わらず人間のために“仮面ライダー”として戦った。

彼の名は仮面ライダーカリス……愛善ハジメである。

そして、ハジメの正体はジョーカーだった。

全てのアンデットは四年前に封印された。

ハジメも……カズマによって封印されたのだ。

「君たちは世界を崩壊させないために彼を封印した。仲間であるはずだった愛善ハジメを……」

鳴滝の心は刃のように三人の心に突き刺さって行った。だが、鳴滝の言葉は三人を怒らせた。

「ハジメは確かに一度俺が封印した。だが、あいつは……」

カズマはその先は言えなかった。

本来アンデットは倒せないためライダーはアンデットを封印している。

だが、ジョーカー・・・ハジメは封印されずに死んだ。

一月前アルビノジョーカーとの戦いのためにムツキの持つ“リモート”のカードの力でカズマ達はハジメの封印を解いた。

だが、ハジメは最終的にアルビノジョーカーが召喚した「超古代の絶対的な最強の力」である巨大邪神14を倒すために自分の命を投げ出したのだ。

カズマの代わりに・・・。

そのことを知っているためサクヤもムツキも何も言わない。

だが、鳴滝は黙ってくれなかった。

「では聞くが・・・ジョーカーがバトルファイトに生き残るあるいはほかのアンデットがバトルファイトに生き残ったときどうして人類が滅びると思ったのだね？」

「それは組織でそう聞いたから・・・」

鳴滝の言葉にサクヤが答える。

今はもう存在しないがカズマとサクヤは組織からアンデットのことを聞いた。

「だったら私の話も聞いてもらおう。ディケイドが生きていたら世界は滅びる！君たちが倒すのだよ！人類の平和のためにね・・・」

鳴滝はそう言った後オーロラに消えて行った。

最期にもう一度「人類のためにディケイドを倒すのだ」と言って。

どのくらい時間がたったであろうか唐突にサクヤが拳を握りしめながら呟くように言葉を發した。

「ディケイドを・・・サイガを倒す」

『ブレイドの世界・・・運命』（後書き）

次回予告

鳴滝の言葉によりサイガを倒そうとするカズマ達。サイガは悩み苦しみながらも彼らと戦うことを決意。だが、悩み苦しんでいるのはサイガだけではなかった・・・。

次回

『ブレイドの世界・・・決断』

『ブレイドの世界・・・決断』（前書き）

色々の意味が解らないかも・・・。

『ブレイドの世界・・・決断』

バイクに乗って風に当たっていたサイガは途中で急ブレーキをかけた。

目の前にいるのは三つのバイク・・・。
嫌な予感がした・・・。

「サイガ！・・・君を倒させてもらっ」

バイクから降りたサクヤがそう言ってきた。
腰にはギャレンバックル。

「なんでだよ・・・」

予感は当たった。

戦わなければいけない・・・。

自分の世界を救うためには死ぬわけにはいかないのだ・・・。

【Turn Up!】

【Open Up!】

カズマ達がゲートをくぐって変身してきた。

戦うか・・・？それとも、戦わないか・・・？
選択する権利がサイガにはなかった。

【カメンライド・・・ディケイド!】

周りに現れたディケイドのシルエットがサイガに重なり、その姿は変わりバツクルから飛び出したプレートが頭に刺さった。

二度と使いたくないこの力……だが、世界を……大切な人を守るためには使わなければならない。

「……………引き返すことはできないのか？」

「無理だ」

ディケイドの質問をギャレンが即答した。
分かっていた……………だが、諦めたくなかった。

「はあああああああ！！！」

レンゲルがレンゲルラウザーを持ってディケイドに突っ込む。
ディケイドもライドブッカーをソードモードにして構えた。

ギャレンとレンゲルがディケイドとの戦いを始める中ブレイドは戦いに参加せずにそれを見ていた。

本当はサイガを信じたい……だが、鳴滝の言う通りなのだ。

アンデットがバトルファイトに生き残ればその種族が繁栄し人類は滅亡する。

それはかつて存在した組織に聞いた言葉……自分たちはその言葉を信じて戦ってきた。

ハジメを封印した……。

仲間を……封印した。

だが、ハジメは甦った。

自分たちと戦ってくれた……。

なのに、ハジメは死んだ……カズマを庇って。

「何をやっている剣時！？お前も戦え！！」

ギャレンから怒声を浴びせられた。

だが、ブレイドは動こうとしなかった……。

【RAPID!】

カードをラウズするとギャレンはラウザーをディケイドに向けた。

ディケイドはレンゲルに斬りかかるがレンゲルはレンゲルラウザーでそれを防ぐ。

だが、すぐにレンゲルラウザーは弾かれてディケイドに斬られた。

「ぐっ……」

更に斬られるレンゲル。

レンゲルは反撃してレンゲルラウザーを振るがそれをディケイドにつかまれてさらに斬られた。

「ぐあ……」

衝撃でレンゲルが吹き飛ぶ。

ディケイドはレンゲルに近づこうとするがギャレンが放った無数の弾丸を一気にくらってのけぞった。

【STAB!】

【RUSH!】

レンゲルはその隙を突くと一気に二枚のカードを装填した。

そして、ディケイドめがけて突進する。

ディケイドはかわそうとするがギャレンの放った弾丸が当たりひるむ。

レンゲルはそのままレンゲルラウザーを構えた状態でディケイドに

突進した。

「ぐう!?!」

ディケイドはうめき声を上げながら吹き飛ぶ。

すぐに立ちあがるがラウザーの刺さった右胸に激痛が走っていた。レンゲルが使った二枚はレンゲルラウザーの？鋭さ？と？貫通力？を上げるカード。

二枚のカードの効果によって先ほどのレンゲルの一撃は凄まじいものになっていた。

何とか立ちあがるとギャレンからの銃撃をかわしてレンゲルを蹴り飛ばした。

そして、ライドブッカーをガンモードにしてギャレンを撃つ。

銃撃を受けてひるんだギャレンに向かって走りながらディケイドはカードを装填した。

【カメンライド・・・リュウキ！】

Dリュウキにカメンライドするとドラグセイバーを右手にもってギャレンの首筋に当てた。

更に、左手でもっているライドブッカーをレンゲルに向ける。

「降参してくれ・・・・・・・・・・さもなくば・・・・・・・・・・殺す!」

二人とも動けなかった。

ドラグセイバーはギャレンの首筋に当たっている・・・・・・・・・・後はそれを振れば戦いを終わらすことができるのだ。

降参してくれ…………。

俺に…………これ以上人を殺させないでくれ…………。

お前等は…………生きてくれ。

「止めろおおおおおおおおお!!!」

叫び声が聞こえた。

Dリユウキではない…………。

ギャレンではない…………。

レンゲルではない…………。

彼は剣でDリユウキを斬った。

咄嗟のことで反応できなかったディケイドはその一撃を受ける。

「カズマ…………」

「サイガ…………俺が相手になる!…………俺が君を倒す
!」

そう言うときブレイドはブレイラウザーをDリユウキに振る。

Dリユウキはドラグセイバーでその攻撃を防いだ。

「俺は…………もう、仲間を失いたくない!…………あんな悲しみはもう二度と味わいたくないんだ!」

ブレイドは叫んだ。

あの日、ハジメは死んだ……。

もうあんな悲しみは嫌だった……。

サクヤもムツキも自分が守って見せる……そう思った。

「剣時……俺とお前は戦わないと分かり合えないのか？」

Dリユウキは叫んだ。

ユウスケの……ワタルの……シンジの顔が頭に浮かぶ。

彼らは生き続けていくはずだった……なのに、死なせてしまった。

戦わないといけない……分かっている。

だけど、それでも希望を捨てたくはなかった。

「うおおおおおおおおおおお!!!!」

ブレイドはブレイラウザーのトレイを展開させるとカードを取り出してラウズした。

自分の弱さを隠すかのように叫びながら……。

【SLASH!】

カードの効果でブレイラウザーの切れ味を強化させるとそのままドラグセイバーごとDリユウキを斬った。

真つ二つになったドラグセイバーを地面に落しながらDリユウキはディケイドの姿に戻って倒れる。

ブレイドはフラフラの状態でその姿を見ていた。

【ファイナルアタックライド・・・ディディディディケイド!】

ディケイドはジャンプするとブレイドとの間に現れたカードを潜り始めた。

ブレイドもカードをブレイラウザーにラウズした。

【KICK!THUNDER!・・・LIGHTING BLAST!
T!】

右足に電撃を纏わせるとディケイドめがけてとび蹴りをする。

「はあああああああああ!!!!!」

二人の足が激突した。

爆発が起きるとお互いの必殺技の衝撃を受けたディケイドとブレイドは変身は解除されることはなかったが地面に落下した。

二人ともふらつく体で何とか立ちあがる。

ディケイドはライドブッカーを構える。

ブレイドはブレイラウザーを構える。

戦いは終わっていない・・・。

【DROP!FIRE!・・・BURNING SMASH!】

【BITE! BLIZZARD! . . . BLIZZARD CLA
SH!】

二人の戦いを邪魔するかのように二つの電子音声が聞こえた。
慌ててブレイドがギャレン達の方を見ると二人ともカードをラウズ
し終えている。

「よくやった 後は俺たちに任せろ!」

「剣時さんはゆっくり休んでいてください!!」

そう言うと二人は同時にジャンプする。

ディケイドは慌ててかわそうとするがブレイドとの戦いのダメージ
とレンゲルから放たれた冷気によって体が動かなかった。

「あ」

重なった

ディケイドの姿が ハジメに。

人類を滅亡する存在だから倒す それは正しい。

なのに、ディケイドが死ぬのがどうしようもなく怖くなってきた。
このままだと彼を倒すことができる なのに、不安になっ
ていく。

――――――――――後は怠谷さんとムツキがや
ってくれる . . . 俺の戦いが終わったんだ。

必死に納得しようとする。

不安になっている自分を抑えようとする。

――――――――――また、仲間を失うのか？

ブレイドは走り出した。

自分が何をしようとしているかだなんて分らない。

これから、やろうとしていることはライダーとして失格なのかもしれない。

だけど……仲間を失いたくなかった。

「やめろおおおおおおおおおおお！！！！！」

レンゲルは？彼？を両足で挟み砕いた。

ギヤレンは？彼？の頭上から炎の力をため込んだ二段つま先蹴りを打ち込んだ。

？彼？は変身が解けるとゆっくりと倒れた……………。

「剣時iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!!?」

デイクイドは変身を解除すると慌てて倒れたカズマに駆け寄った。
剣時は右手をサイガに向けていた。
サイガはその右手を掴む。

「なあ、サイガ・・・・・・・・お前はさ・・・・・・・・こうやって、俺を守ってくれたよな?」

「何を言ってるんだよ・・・・・・・・」

確かにデイクイドはウルフィマジンからの攻撃からブレイドを一度だけ守った。

しかし、ブレイドが受けたのは攻撃というには・・・・・・・・生易しすぎた。

デイクイドとの戦いで消耗している体力で二人の必殺技をともに受けた平気だとは思えない。

「俺ってさ・・・・・・・・馬鹿だよな?破壊者とかジョーカーとか・・・・・・・・いくら、人類を守るためとか言われても仲間と戦いたくないや・・・・・・・・結局、俺にはお前を倒す勇気がなかった」

笑顔でそう言うとかズマの手から一枚のカードが滑り落ちた。

スピードの9・・・・・・・・マツハのカード。

これを使えばライトニングブラストではなくソニックを使うことができた。

必殺技の打ち合いで勝利することができたのかもしれない・・・。

だけど、使えなかった。

無意識のうちにサイガが少しでも死なない確率のある道を選んでい

た。

「なあ・・・・・・・・？俺ってさ・・・・・・・・馬鹿だよな？」

「ああ！！お前は馬鹿だ！！！」

サイガは泣きながら叫んだ。

サクヤとムツキの危険を感じて飛び出してきたくせに最期にはディケイドを倒したくないと感じてしまった。

誰も死なせたくない・・・・・・・・だから、自分を死なせることにした。

サイガの叫びを聞くとカズマは力なく笑った。

すでに、体は言うことを聞いてくれない。

サイガを守ることばかり考えていて防御も何もしていなかった・・・。

だけど、守ることができた。

「逝くな・・・・・・・・これ以上俺のせいで死なせたくないんだ！！！」

「生きてくれ・・・・・・・・そして、お前はお前の運命を切り開いてくれ・・・・・・・・」

サイガが握っているカズマの右手から力が抜けた。

何度目になるだろう・・・・・・・・？

戦士の死に立ち会うのは・・・・。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

変身を解いたムツキが泣き叫びながらサイガを殴る。

サイガはされるがままになっていた。

サクヤはカズマの脈を測ったり心臓の鼓動を聞いたりしたがすぐに力なく座り込んだ。

その瞳からは涙が流れている。

「何でお前なんかを庇ったんだ！？あの人は死ぬべきじゃないのに！！」

ムツキはサイガを殴り飛ばすと睨んだ。

サイガは何も言わない……それが余計に気に食わなかった。

「……………殺したのはお前等だろ？」

サイガは立ちあがると俯きながらそうつぶやいた。

その言葉に感情はない……怒りも悲しみも憎しみも……空っぽだった。

ムツキはその言葉に一瞬目を丸くすると更にサイガに殴りかかる。だが、途中でサクヤによってムツキが殴られた。

「怠谷さん！？」

「お前は黙ってろ……サイガ」

ムツキに一言言つとサイガのことを見る。

正直、今すぐにサイガを殴りたかった。だが、それはやってはいけないことだ。

カズマを殺してしまったのはサイガではなく自分たちなのだから。ここで彼を殴ることはその罪から逃げることだ。だから――――

「この世界から出て行ってくれ」

そう言った。

ムツキが慌てて文句を言おうとするがサクヤに睨まれて黙る。

サイガは別に驚いた様子もなくサクヤの話を聞いていた。

「俺はあいつの……カズマの想いを無駄にしたくない……
だが、俺は……俺たちはお前を倒さなくてはいけない!!……
・だから、俺たちの目が届かないところに行ってくれ!!……
頼む」

サクヤはそう言って静かに頭を下げた。

その様子にはムツキだけではなくサイガも驚く。

「何をやってるんですか!? 怠谷さん!!」

「お前は無駄にする気か? ……あいつの命を懸けた最後の行動を」

サクヤに言われるとムツキは黙った。

カズマは自分の命を犠牲にしてサイガを守った……そんな彼を倒すことはカズマの命を懸けた行動を無駄にするということなのだ。

ムツキはゆっくりとサイガに頭を下げた。

せめて……あの人の行動だけでも無駄にはしたくない。

ディケイドライバーが光る。

サイガの背後にオーロラが出現した。

オーロラには『仮面ライダーファイズ』のマークが映っている。

サイガはそれを無視してカズマの遺体に向かうとそれを殴った。

「貴様!!」

すぐに頭を下げていたムツキが怒りの咆哮を上げる。

だが、サイガはそれを無視してサクヤにムツキに聞こえない声で何かを伝えるとオーロラを潜って行った。

ムツキが慌てて追いかけるがオーロラはすぐに消えた。

「あの野郎………なんで最期に剣時さんを………」

「それがあいつの優しさなんだ」

「はい？」

サイガへの怒りを燃やしていたムツキはサクヤの一言で間抜けな表情をした。

大切な後輩の遺体を殴られたというのにサクヤは殴ったサイガを褒めたのだから。

「あいつからの最期の伝言だ………カズマを殺したのは俺だ。だから、お前等は誰の命も奪っていない………人類のために戦い続ける………だと。あいつは………俺たちが背負うべきものを勝手に背負ってっただよ………」

それを聞いてムツキは固まった。

サイガはカズマを殴ることでカズマを殺したのは自分だということにしたのだ。

誰のために・・・・・・・・？

自分たちのためとしか考えられなかった・・・。

カズマを殺したのはムツキたちだ。

だから、カズマの死はムツキたちが背負わなければならない。

だが、サイガは最後にカズマを殴ることで・・・・・・・・カズマを殺すことでカズマの死を自分が背負うことにしたのだ。

人類のために戦い続けなければならない残された戦士たちのために・・・・・・・・。

「あいつとは・・・・・・・・別の運命で会いたかった・・・」

サクヤの弦きが空に消えて行った・・・・・・・・。

サクヤは振り返るとカズマの遺体を両手で持った。

そして、ゆつくりと足を進めていく。

ムツキもそれを静かに追いかけた。

『ブレイドの世界・・・決断』（後書き）

次回予告

次の世界に向かったサイガはスマートブレインハイスクールの教師になっていた。新人教師として学園を訪れたサイガは写真部の坂上タクミと原内由里と出会って親しくなってしまう・・・。

次回

『ファイズの世界・・・学園』

『ファイズの世界・・・学園』（前書き）

二話構成をしていたらいつもの倍になってしまった・・・。

『ファイズの世界・・・学園』

【ファイズの世界】

スマートブレインハイスクール・・・その学園で警備員は懐中電灯を片手に見回りをしていた。

「おや？どうしたんだ？」

懐中電灯の光に女生徒の姿を見つけた警備員はすぐに女生徒のもとに駆け寄った。

すでに空は暗くなっており学園に生徒が残っているはずがないのだ。

「私は・・・この学校に入学することを楽しみにしていたの」

「何言ってるんだ？その制服はうちのだろ？」

懐中電灯の光に当てられている女生徒の服は間違いなくスマートブレインハイスクールの物。

だが、女生徒はまるで入学できなかったかのように言うので警備員は眉間にしわを寄せた。

「入学できなかったの・・・だって、私・・・オルフェノクだから」

そう言った瞬間女生徒の姿は光だしバタフライオルフェノクに変わった。

目の前の女生徒がオルフェノクだったことに驚きを隠せない警備員は声を出そうにも出せずに後ずさりする。

その警備員をバタフライオルフェノクが襲い掛かろうとした瞬間一台のバイクがバタフライオルフェノクにぶつかった。

「ぐっ……ファイズ!？」

バイクに乗っていた仮面の戦士……仮面ライダーファイズはバイクを降りるとバックルにあるファイズフォンからミッションメモリを抜くとマシンのハンドルに挿入しハンドルを引いた。

バタフライオルフェノクはファイズに襲い掛かるがファイズはエネルギーブレードとなったハンドル……ファイズエッジでバタフライオルフェノクを斬る。

バタフライオルフェノクが斬り飛ばされた隙を突いてファイズはファイズフォンを開くと?ENTER?を押した。

【Exceed Charge!】

ファイズはファイズエッジを構えなおすとバタフライオルフェノクに突っ込んで行きバタフライオルフェノクを斬った。

バタフライオルフェノクは絶叫しながら爆発しその場には赤く中の文字が浮き出た。

オルフェノクを倒したのを確認するとファイズは腰を抜かしている警備員をしり目にバイク……オートバシンのハンドル部にファイズエッジを差し込んだ後ソレに乗り込むとその場を去った。

また、死なせてしまった……。

自分は生きている……カズマを身代わりにして。

今すぐこの世界……いや、すべての世界から消えてしまいたい。

でも、旅を続けなくてはいけない……自分の世界を守らなくてはいけないから。

大学……もう行くこともないんだろうな。

俺にはもう学園生活を送る資格さえないのだから。

人を殺した俺には……なのに、なんで……。

サイガはズボンのポケットからソレを取り出した。

それはスマートブレインハイスクールからの書類だった。

この世界に来た瞬間にポケットに入っていた。

その書類には今日からサイガが学園で新任教師として働くということが書かれている。

「学園生活を捨てた俺が教師になるとは皮肉だな……これに逆らえばもう、誰も死なずにすむのかな……?」

学園の教師になることが自分のこの世界での役目ならそれに逆らえば自分は役目を果たせなくなる。

つまり、この世界のライダーと出会う確率も格段と減る。

ライダーが死ぬこともなくなる……。

「ここか・・・？」

サイガは足を止めた。

目の前にはスマートブレインハイスクールの校門。

サイガはゆつくりとソレを潜る。

自分が旅を止めたとき・・・自分の世界は滅びるのだから。

「それでさ、昨日真夜中に見回っていたらオルフェノクに襲われて・・・そしたら、ファイズが助けてくれたんだよ!!」

「なるほど・・・やはり、ファイズはこの学園を守っているのか・・・」

教師に昨日の出来事を話している警備員の話聞きながらサイガは学園に入った。

自分が学園の教師になっていることからファイズが学園の関係者だということには気づいていた。

だから・・・本当はこんな校門をくぐりたくなかった。だけど、止まることは許されない。

「ほら〜タクミ！急がないと遅刻するわよ!!」

「待つてよ由里ちゃん!？」

サイガの目の前をインスタントカメラを持った活発そうな女生徒とレフ板を持った女生徒に比べていささか弱気な男生徒が駆け抜けていく。

そこに、校舎の方から周りと違う白い制服を着用した四人組が歩い

てきた。

その四人の内の三人はカメラを持っている由里と呼ばれた女性を突然囲んだ。

「今……俺たちの写真を撮ってたよな？」

「困るんだよね……ラッキクローバーはアイドルじゃない」

「違います！！由里ちゃんは写真部で……だから、カメラを持っていただけです！！」

二人の言いがかりをタクミと呼ばれた青年が解こうとするが由里を囲んでいた三人のうちの一人でラッキクローバー唯一の女性があるからさまため息をついた。

「はぁ……そんなウソ、通じるわけがないでしょ？」

「……誰もかれもが貴方たちに憧れていると思っ
たら……大間違いよ！！」

ラッキクローバーの言いがかりにむかついた由里は目の前の女性を睨みつけながらそう言い放った。

由里の言葉を聞くと最初に由里たちに言いがかりをつけた男――
――玄田が由里の手からカメラを奪った。

「何するんですか！？」

「没収……」

突然カメラを奪われて動揺している由里に見せびらかすかのように

カメラを見せるとソレを持っている手を思いっきり振り上げた。
玄田が何をしようとしているのか周りにいる人たちはすぐに察した。
・・・。

カメラを投げつけようとしているのだと。
だが、その腕を誰かがつかんだ。

「・・・・・・・・学園のアイドルはやることが随分ときついな？」

「はあ！？・・・・・・・・つくぐ！？」

玄田がカメラを投げる直前にその腕をつかんだサイガが皮肉を言いながら手に力を入れると玄田は痛みに表情を歪ませながらカメラを手放した。

玄田が手放したカメラをタクミが地面に落ちる前に何とか拾い上げる。

「こいつらはさっき登校してきたばかりだ・・・・・・・・俺が保証する」

そう言いながらサイガは玄田の手を離れた。

「てめえっ！！」

右手が自由になると玄田はサイガに殴りかかった。

自分に逆らったサイガが許せなかったのだ。

だが、サイガは玄田の拳を左手で弾くと右手で玄田の胸ぐらをつかんだ。

「遅刻するぞ」

それだけ言い放って玄田の胸ぐらを離す。

そして、周りが啞然とする中さっさと校舎に入って行った。

突然現れてラッキークローバーに逆らったサイガの様子に啞然としていたタクミ達も学園の鐘が鳴ると慌てて校舎に入って行った。

残されたのは……ラッキークローバーのみ。

「あの力……まさか、ファイズ？」

由里を囲んだ三人のうちの一人——城金は驚いた表情でそう言う。

「どうするの？」

ラッキークローバーの紅一点である朱川は先ほどの騒動に参加しなかった自分たちのリーダー……百瀬にそう聞いた。

百瀬は面白そうに……そして、不敵に笑うと三人の方を見る。

「ファイズは我らの同胞を何人も葬った……奴が少しでもファイズである可能性があるのなら……消すぞ！」

百瀬の言葉に三人は頷いた。

サイガがファイズの正体だと思って……。

「前任の前田先生が行方不明になったのでそれまでこのクラスを担

当することになった進藤サイガだ」

登校中の騒動が一段落つくときサイガは教壇に立っていた。
旅を放棄しないためにはこの世界での役目を果たさなくてはいいけな
い……。

だから、教壇に立っていた。

この世界のライダーを死なせるかもしれない。

「あつ！？先生だったんですか！！」

サイガが出席を取ろうとした瞬間女生徒が一人立ちあがった。
見覚えがあった……ラッキークローバーに言いがかりをつけ
られていた由里という名の女性だ。

サイガも由里に気付いて周りを見渡すと由里と一緒にいたタクミと
いう青年も同じクラスにいた。

出席を取り終わると由里とタクミがすぐにサイガのところに駆け寄
ってきた。

「あの時はありがとうございました！！私は原内由里と言います！
こっちは坂上タクミ」

由里に紹介されたタクミはサイガに向かって軽く頭を下げる。
二人の名前は出席の時にすでに知っているのと自分の名前もすでに
紹介しているためサイガはいきなり本題に入ることにした。

「あいつらは何者だ？」

「彼らはラッキークローバー・・・生徒会のようなもので教師よりも強い権力を持っているんです」

「ラッキークローバーか・・・」

サイガは由里の説明を受けながら少し考えた。
学園の関係者がファイズであることは間違いないだろう・・・つまり。

ラッキークローバーの中にファイズがいるのではないか・・・
?っと。

「今日は災難だったね由里さん」

サイガが考えているとクラスメイトの内の一人が三人の話に参加してきた。

サイガは出席の時に確認した顔と名前で彼が水菜マサトという名だということに気付いた。

マサトはそのまま由里の話を聞かずに隣にいたタクミの肩をつかむ。

「男だったら女性を庇わないとダメだろ・・・? 由里さんもこんな弱いやつを捨てて僕と付き合ってくれないか?」

「その話はお断りしたはずよ」

話が読めないサイガはタクミにこっそりと二人の関係を聞いた。
タクミによるとマサトは以前、由里に告白して振られたらしい。
だが、諦めることができずにこつやって毎日話しかけてくるという。

サイガが軽く由里に同情していると一限目の教師が教室に入ってきて

た。

それに気付くと入れ替わるようにサイガは教室を出ていく。

「あつ先生！一緒に昼を食べましょうよ！写真部の部室で待ってますんで！！」

由里の言葉に片手を上げて応えるとサイガは廊下を歩いて行った。

昼休みになるとサイガは約束通り写真部の部室を訪れ購買で買ったパンをかじっていた。

「そういえば……先生はなんで私たちを助けてくれたんですか？」

「さあな……強いて言えばあいつらが気に食わなかっただけだ」

サイガの言葉を聞くと由里は納得するように大きく頷いた。

「本当に嫌な奴等なんですよ……オルフェノクなみに大っ嫌い！！」

由里がそう言った瞬間隣に座っているタクミの表情が一瞬強張ったような気がした。

「でも、この学園はファイズが守ってくれているから大丈夫だよ」

「ファイズなんているわけがないでしょ」

タクミの言葉をあつさりと否定する由里を見ながらサイガは考える。
ファイズが学園を守る理由を……。

そこに……守りたいものがあるから？

だとしたら、とてもではないがラッキークローバーがファイズだという可能性はない。

「ここにいたんですか……進藤先生」

そのまま、三人が雑談していると突然ドアが開いて周りに比べてかなり目立つ白服の生徒が入ってきた。

彼らがラッキークローバーであることは例え朝の出来事がなかったとしても気づくだろう。

いるのは玄田と城金と百瀬……朱川のいなかった。

「なんか用か？生憎昼の誘いは見ての通り先約がある」

「先生に用があるんですよ……同行して頂けますか？」

百瀬の言葉に頷くとサイガは静かに席を立った。

例え確率が0に近くてもファイズの正体は確認しておきたかったからだ。

学園の外に出た四人は人のいない場所に来た。

「ついに見つけたぞ・・・ファイズ!!」

「何!?!」

突然玄田にファイズと呼ばれてしまったサイガは困惑した。
だが、すぐに彼らの思い違いだと気付く。

そして、同時に自分も思い違いをしていたことにも・・・。

「残念ながら俺は違う」

「とぼけるな!!うおおおおお!!」

サイガの言葉に耳を貸さなかった玄田は吠えながらその姿をドラゴンオルフェノク 龍人体に変えた。

隣にいた城金もセンチピードオルフェノクに姿を変える。

「オルフェノクだったか・・・変身!」

サイガもすぐにディケイドライバーを腰に装着するとライドブッカイからカードを取り出してバツクルに装填した。

【カメンライド・・・ディケイド!】

サイガの周りに現れたディケイドのシルエットがサイガに重なった後バツクルから飛び出したプレートが頭に刺さってサイガの姿も変

わった。

「ファイズではない……」

「お互い見当外れをしていたということだ」

そう言い捨てるとディケイドはドラゴンオルフェノクを殴った。

横からセンチピードオルフェノクが殴りかかってくるがそれを左手で防いで右手でセンチピードオルフェノクの腹を殴る。

そして、襲い掛かってきたドラゴンオルフェノクを蹴り飛ばした。

二体は吹き飛んだがすぐにセンチピードオルフェノクが鞭でディケイドを攻撃してきた。

「ぐあー！」

センチピードオルフェノクの攻撃で地面に転がったディケイドは体制を立て直すとライドブッカーからカードを取り出した。

「力を貸してくれ……カズマ！変身！」

【カメンライド……ブレイド！】

そのカードをバックルに装填するとディケイドはDブレイドに姿を変えた。

自分を庇って死んだ友の姿に……。

Dブレイドは続けざまにライドブッカーからカードを取り出してバックルに装填する。

【アタックライド・・・マッハ！】

カードの能力で高速移動するとセンチピードオルフェノクを連続で斬った。

そして、一瞬でドラゴンオルフェノクの目の前に移動すると連続で斬っていく。

「ぐああああー!!」

「これで終わりだ」

Dブレイドの連続斬りでドラゴンオルフェノクが吹き飛ぶとDブレイドはすぐにカードを装填した。

【ファイナルアタックライド・・・ブブブレイド！】

Dブレイドはジャンプすると右足に電撃を纏ってドラゴンオルフェノクにとび蹴りした。

ドラゴンオルフェノクは絶叫しながら爆発する。

それを見た百瀬は一度ため息をつくと自身もタイガーオルフェノクに姿を変えた。

そして、青い炎を燃やしながら倒れているドラゴンオルフェノクに触手を伸ばす。

すると、ドラゴンオルフェノクはその姿を魔人態に変えて復活した。

「まじかよ・・・」

「まさか、ラッキークローバーがオルフェノクだったなんて・・・」

物陰でディケイド達の戦いを見ていた由里は思わずそうつぶやいた。目の前ではディケイド達が激闘を繰り広げているが1対3で分が悪いのかかなり苦戦している。

「先生がディケイド・・・・・・・・」

由里と同じく戦いを見ているタクミはそうつぶやいた。

最初はラッキークローバーに呼ばれたサイガを心配して様子を見に来たのだが結果は自分たちの予想をはるかに超えていた。

「ぐわあああ!!」

目の前ではタイガーオルフェノクの一撃をくらったDブレイドがディケイドの姿に戻っていた。

タクミはそれを確認すると慌てて自分のバックを開ける。そして、中に入っていたベルトを腰に巻いた。

「あら・・・？何をしているのかしら？」

二人が慌てて声のした方を見ると朱川が立っていた。

二人はすぐに身構えた。

ラッキークローバーがオルフェノクだということは彼女も…………。

そんな二人の様子を見た朱川は二人を鼻で笑うとその姿をロブスターオルフェノクに変える。

「私たちの正体を知ったらしいから……死んでもらうわね」

「由里ちゃん逃げて!!」

それを確認したタクミはバックから取り出したファイズフォンを開いて555と番号を押した後?ENTER?を押した。

【Standing by】

「変身!」

ファイズフォンを閉じるとドライバーのバツクル部に突き立てて左側に倒した。

【Complete!】

タクミの体に赤いフォトンストリームが流れるとタクミは仮面ライダーファイズに姿を変えた。

ファイズは構えるとロブスターオルフェノクに殴りかかる。

そして、ファイズとロブスターオルフェノクはディケイド達の方角に移動していった。

残された由里は呆然としていた。

ラッキークローバーがオルフェノクだったり自分たちを助けてくれたサイガがファイズと同じような戦士に変身したことには驚いた。だが、それ以上に驚くべきことが経った今起こった。

「タクミが……ファイズ」

「ファイズ……仲間の仇！」

ロブスターオルフェノクと戦っているファイズの姿を見たドラゴンオルフェノクはロブスターオルフェノクに加勢してきた。

ロブスターオルフェノクを殴り飛ばしたファイズだったがすぐにドラゴンオルフェノクに殴られる。

殴り飛ばされたファイズにドラゴンオルフェノクは追い打ちをかけようと跳びかかったがファイズは素早くミッションメモリをファイズショットに挿入して起動させるとファイズフォンを開いて？ENTER？を押した。

【Exceed Charge！】

ファイズは跳びかかってくるドラゴンオルフェノクを右手に装着したファイズショットで殴った。

カウンターを受けて吹き飛んだドラゴンオルフェノクは体から青い炎を出しながらも殴られた胸の部分を左手で抑えながらファイズに跳びかかった。

【Exceed Charge！】

だが、ファイズは再び？ENTER？を押すともう一度ドラゴンオルフェノクを殴った。

そして、ファイズエッジを持つと全身から青い炎を吹きだしているドラゴンオルフェノクを斬る。

「ぐお……おおおお！！」

ダメージに耐えきれなくなったドラゴンオルフェノクは爆発し赤く

中の文字が浮き出た。

それを見たタイガーオルフェノクがドラゴンオルフェノクを復活させるためにファイズ達の方に向かおうとするがディケイドが跳びかかってきたセンチピードオルフェノクを殴り飛ばしてカードを装填した。

【アタックライド・・・ブラスト！】

ディケイドがライドブツカーの引き金を引くと無数の光弾がタイガーオルフェノクの背中に当たった。

タイガーオルフェノクが痛みで振り返るとライドブツカーをソードモードにしたディケイドが斬りかかる。

「貴様あー!!」

「お前の相手は俺だ」

ファイズはロブスターオルフェノクを斬り飛ばして再びファイズフオンの?ENTER?を押してロブスターオルフェノクにとどめを刺そうとしたがセンチピードオルフェノクが鞭を振り回してファイズに攻撃した。

「ぐわあああ!!」

その衝撃でベルトが吹き飛び変身が解除されたタクミは地面に転がり込む。

「タクミ!!!?」

慌てて由里が駆けつけた。

だが、タクミのもとに駆けつけようとする由里の前にロブスターオルフェノクが立ちふさがる。

「まずはあなたを殺してあげるわ」

「やめろおおおおおおおおお!!!」

由里に襲い掛かろうとするロブスターオルフェノクを見たタクミは吠えた。

すると、その姿は変わっていく。

仮面ライダーではなく・・・オルフェノクに。

タクミはウルフォルフェノクに姿を変えると由里とロブスターオルフェノクの間に入りロブスターオルフェノクを殴り飛ばした。

由里は目を丸くしている。

タクミはファイズだった・・・。

そして、オルフェノクでもある。

「きゃああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

由里は叫んだ。

信じたくない現実が目の前にあったのだ。

叫び終わると由里はその場を逃走した。

それを見たウルフォルフェノクは呆然としている・・・。

「待って!!!由里ちゃん!!!」

だが、タクミの姿に戻ると由里を追いかけた。

ロブスターオルフェノクはタクミを追いかけようとするがディケイドの放った光弾が背中に命中してひるんだ。

「・・・・・・・・・・一旦引くぞ」

タイガーオルフェノクの一言でロブスターオルフェノクとセンチピードオルフェノクはその場を去った。

残されたディケイドは変身を解くと地面に転がっているファイズドライバーを拾う。

「ファイズはタクミだったか・・・・・・・・」

ファイズドライバーを見ながらそうつぶやくサイガ。

これから起こるかもしれない運命に不安を感じたが今はタクミと由里が心配だった。

由里はオルフェノクが大っ嫌いだと言っていた。

タクミはそのオルフェノクだったのだ・・・・。

足音が聞こえた。

サイガが慌てて振り向くと学園の制服を着た男性が走っていた。

水菜マサトだ・・・・。

「ちっ・・・・・・・・」

サイガは思わず舌打ちした。

学園を影から守っていたタクミ。

オルフェノクを嫌う由里。

由里に片思いするマサト。

問題はオルフェノクだけではなくた・・・。

『ファイズの世界・・・学園』（後書き）

次回予告

由里に拒絶されたタクミは学園を守ることがむなしくなった。そんなタクミの前にファイズドライバーを持ったサイガが現れる。

次回

『ファイズの世界・・・苦悩』

『ファイズの世界・・・苦悩』（前書き）

今回も無駄に多い。

ていうか、最後が酷すぎると自分でも思っ

『ファイズの世界・・・苦悩』

次の日、タクミが学園を休んだ。

サイガがそのことを生徒に伝えると一瞬由里が驚いた表情になるがすぐにそっぽを向いてしまう。

由里がタクミを拒む理由がずっと騙されていたからなのかタクミがオルフェノクだからなのかはサイガにはわからない。
だけど・・・・・・・・・・助けてやりたい。

「ちっ」

サイガは自己嫌悪に堕ちた。

今まで多くの人間の命を奪っているくせにそんなことを考えてしまっている自分に苛立った。

もしかしたら、タクミの命も奪ってしまうかもしれないのに・・・。

ホームルームが終わりサイガが教室を出ていくと一人の男が明らかにいつもと違う由里の席に近づいて行った。

「由里・・・・・・・・タクミのことを忘れて・・・・・・・・この僕と付き合い合ってくれないか？」

そう言いながらマサトは手を差し伸べた。

由里を救うかのように・・・・・・・・。

「お断りよ！何度も言わせないで」

だが、由里からの返答は変わらない。
差し伸べられた手もふり払ってしまった。

そして、そのままマサトの横を通り過ぎようとしたが――――

「・・・・・・・・・・何でそこまでオルフェノクのことを気にするんだい？」

マサトの言葉で由里は立ち止まった。

驚愕の表情でマサトを見る。

「知らないとも思っていたのかい？彼の居場所はここではない！
・・・・・・・・君の隣にいるべき男はこの僕なんだから」

由里は何か言いたそうな顔をしたがそのまま廊下に出て行った。

廊下にはまるで由里を待っていたかのようにサイガが壁に背中を預けていた。

由里もその隣に立つ。

「・・・・・・・・・・先生も仮面ライダーだったんですね・・・・・・・・
タクミと同じ」

先に沈黙を破ったのは由里だった。

「・・・・・・・・・・違う。確かに俺は仮面ライダーだがタクミとは違う。
・・・・・・・・あいつのように影から誰かを救い続けることなんてできない」

由里はサイガのその言葉で黙りこくってしまった。

今までファイズがオルフェノクから人を救ったという話はいくつもあった。

それらが全部タクミのことだと思い出したからだ。

「先生……私はどうしたらいいんですか？タクミを受け入れるべきなんですか？それとも……」

この先を由里は言わなかった。

だが、サイガは由里が言おうとしていることを察した。
だからこそ――――

「それは……自分で考える」

「えっ？」

「あいつを受け入れるのも……避けるのもお前自身だ。そして、それを決めるのもお前だ……俺ではない」

サイガはそう言うつと廊下を歩きだした。

由里は驚いた表情でサイガの方を見ている。

やがて、サイガが階段の近くまで行った時決心がついたのか由里がサイガに向かって言葉を發した。

「先生……私……やっぱり、タクミのこと……」

その続きを聞く前にサイガは階段で下に降りて行った。

そして、外に出るとまっすぐ校門が出る。

一人の青年に落し物を届けるために……。

「俺や由里がどう考えようと……最終的に決めるのはあいつだしな……」

ファイズドライバーを見ながらサイガはそうつぶやいた。

そして、マシンディケイダーに乗り込むと辺りを散策し始めた。
生徒と話をするために・・・。

タクミは海をぼんやりと眺めていた。

海はすべての生命の源と言われている。

だが、自分の命はすでに失われている・・・。

「授業・・・・・・・・さぼっちゃったな」

ポツリとつぶやく。

授業をさぼったことには罪悪感があった。

だけど、あの子に・・・・・・・・由里に合わせる顔がなかった。

「何故破壊者を倒さない？」

声が聞こえた。

タクミが振り向くとそこにはあまり見たくない顔がある。

「また・・・・・・・・あなたですか？」

「以前にも言っただろう？破壊者は世界を滅ぼす！はやく彼を倒し

たまえ！！」

その男ーーーーー鳴滝は周りに人がいないのを良いことに叫ぶようにタクミに語った。

以前、学園の地下から偶然ファイズドライバーを手にした時にも聞こえた声だ。

いずれ、現れる破壊者を倒せ。

声はそう言った。

そして、進藤先生とーーーーーディケイドと接触した昨日初めて自分の前に姿を現した。

ディケイドを倒せ。

言われたのは声のみだった時とほぼ同じ。
最初はディケイドを倒そうと思っていた。
だけど、すでにその気はないーーーー。

「僕は……学園を守れば良かったんだ。だけど、もう僕にはそれができない……進藤先生ならきつと学園を……由里ちゃんを守ってくれる」

それが、タクミの本当の気持ちだった。

タクミはもう戦えない。

ファイズギアが無いからではない……戦う意味を失ったからだ。

守りたかった人からの拒絶。

覚悟はしていたが……そんなものは何の役にも立たなかった。

だが、オルフェノクはこれから学園を襲うだろう……だから、サイガを倒したくなかった。
彼なら自分の代わりに学園を……由里を守ってくれると信じているからだ。

「……………後悔しても知らないぞ」

鳴滝はそう捨て台詞を言うとオーロラを潜ってその場から姿を消した。

更に、時間が過ぎって行った……。

腕時計で時間を確認すると時刻はもうすぐ12時。

オルフェノクでも空腹があるのか？それとも、毎日お昼を食べていたからかは知らないがお腹がすいてきた。
そう思ったときコンビ二弁当を渡された。

「何の用ですか？……………進藤先生」

「……………俺のことを？ディケイド？とは呼ばないんだな」

「……………授業はまだ終わってないはずですが？」

「落し物だ」

そう言うとサイガは鞆に入れていたファイズドライバーをタクミの

そばに置いた。

タクミは驚いてファイズドライバーに触れようとする。戦いの土壇場で無くしたのには気づいていたがサイガが所持していることには気づかなかったのだ。

だが、ファイズドライバーに触れようとしていたその手は途中で停止した。

「いりません……これはもう、僕にはいらないんです」

サイガはタクミの言葉を見殺しながらコンビ二弁当を頬張っていた。だが、その目は明らかに別の方向を向いている。

「…………お前が海にいてよかった」

サイガの言葉でタクミは気が付いた。

何故自分の居場所が分かったのか？

表情に出ていたのかサイガはすぐに続きを言う。

「海は生命の源……だから、悩んで海に来るということはお前は生きているということなんだ」

「生き…………ている…………？」

タクミはその言葉を一言一言確かめるように発した。

だが、すぐに怒りが湧いてきた。

傍に合ったファイズドライバーをつかむとそれを海に向かって放り投げる。

「何するんだ!？」

「あなたに何が分かる？僕は……自分の命を失った挙句……
……目標まで失ったんだ」

「由里を……守るということか？」

サイガの言葉でタクミは黙った。
だが、その沈黙が肯定を意味しているという子とはすぐに理解できる。

「先生……これから学園を頼みます」

タクミはそう言うとオートバシンに乗って海から離れていく。
サイガはその光景を眺めていた後食べ残しの弁当と手を付けていない弁当をそこにおいて海の中を歩き出した。

「どこだ？どこにある？」

広い海の中からファイズドライバーを見つけるのは困難だった。
水が冷たい……体温が低くなっていくのが分かる。

「……どうして、こんなことをしている？」

「……生徒を導くのが教師の務めだからだ。」

サイガはそう思い込みながら作業を続けた。

仮にファイズドライバーを見つけてそれを復活したタクミに渡したとしても最悪の運命からは逃れられないかもしれない。

だけど、あいつは運命を変えた。

俺が死ぬという運命を……あいつはその身を犠牲にして変えた。

「だから、俺も変える！……逃げるんじゃない！変えるんだ
！！」

スマートブレインハイスクールの校舎の中で由里はサイガを捜していた。

一緒に昼を食べようと思ったのだ。

……そして、ついでにタクミのことを相談しよう。

「何処に行くんだ？」

そんな由里の前に百瀬が曲がり角から歩いてきた。

「……あなたたちには関係ないでしょ？今、ここで私を襲ったらあなたたちの正体がばれるわよ」

「その心配はもういらない」

「えっ？」

由里が聞き返すと同時に大勢の叫び声が聞こえた。

慌てて窓から外を見るとセンチピードオルフェノクが人間を次々と灰に変えている。

「我々はもう隠れないことにした。ファイズの正体も知ったことだしこの学園を支配させてもらおう……手始めにこの学園の生徒を皆殺しにする」

生き残った生徒は校庭で一塊にされていた。
みんな目の前にいるオルフェノクに恐怖し絶望している。

「喜びたまえ……運が良ければ我々と同じオルフェノクになれる」

百瀬の言葉でセンチピードオルフェノクが鞭を振るおうとしたがその手は止まった。

そして、背後に目を向ける。

そこには――タクミがいた。

「今更何のようだ？裏切り者」

百瀬の皮肉を浴びせられてもタクミは何も言わなかった。

本当はあの後どこか遠くに行こうと思った。

だけど、やり残したことがあった。

「最後に……お前達だけでも道連れにする」

タクミの姿が変わっていく。

生徒の悲鳴がタクミの耳に届いた。

「……坂上もオルフェノクだったのか!？」

「……いい加減にして!!……もう、私たちは終わりなの？」

「……この化け物おおおおおおお!!」

ウルフォルフェノクへと姿を変えたタクミに様々な罵声が浴びせられる。

ウルフォルフェノクはそれらを無視してまっすぐ百瀬に向かって飛び込んだ。

「まずはお前を倒す!!」

「はい、残念」

右手の爪で百瀬を引き裂こうとしたウルフォルフェノクだったが口ブスターオルフェノクが間に入り込んでウルフォルフェノクの腹を殴った。

地面に叩きつけられたウルフォルフェノクはすぐに立ち上がると口ブスターオルフェノクに殴りかかる。

だが、今度はセンチピードオルフェノクが振った鞭がウルフォルフェノクを襲う。

その攻撃でひるんだウルフォルフェノクを口ブスターオルフェノクがサーベルで突いた。

「ああ……」

ウルフォルフェノクは吹き飛びながらタクミの姿に戻って地面に転

がる。

「タクミー!!」

その光景を見た由里が周りを押してタクミのもとに駆け寄った。
由里によつて優しく起こされたタクミが見たのは……今にも泣きそうな表情をした由里の顔だった。

「由里ちゃん……」

「タクミ……ごめんね。タクミはいつも一人で戦ったのに拒絶な
んかして……本当にごめん!!」

タクミは目を見開いて驚いた。

何故由里が誤っているのか理解できない。
だって、由里の言葉はまるで……タクミを受け入れているか
のようだったから。

「二人とも仲がいいのね……思わず殺したくなっちゃう」

泣きながら謝っている由里と茫然としているタクミの前にロブスタ
ーオルフェノクがサーベルを突きつけてきた。

「さようなら」

茫然としていたタクミは我に返ったが反応が遅れてかわすことはで
きない。

由里はそんなタクミを庇った。

そして――――――――――

「ぐあ!？」

一台のバイクがロブスターオルフェノクにぶつかった。

「……………先生?」

タクミと由里は同時にそうつぶやいた。

そして、バイクからびしょ濡れの状態のサイガが降りる。

「何でここにいるんだ?」

サイガは笑みを浮かべながらタクミそう言った。

タクミも一瞬驚いた表情をした後サイガと同じように笑みを浮かべながら言い放つ。

「学園を守るためですよ!……………僕が守りたい者がここにあるから」

「吹っ切れたようだ……………じゃあ、忘れものだ。今度は受け

取れよ？」

そう言つてサイガはファイズドライバーをタクミに投げた。
タクミはそれを慌ててつかんだが驚愕の表情を浮かべている。
だが、びしょ濡れの状態のサイガを見てサイガがファイズドライバ
ーを持っている理由を悟った。

「泳ぐにはまだ寒いですよ？」

「ああ……風邪ひきそうだよ……って、ぶあつくしょん!!」

「本当に大丈夫ですか？」

タクミは明らかに大丈夫そうではないサイガを心配するがタクミの
制服のすそを誰かがつかんでいた。
振り向くとつかんでいるのは由里。

「タクミ……帰ってくるよね」

その目からは不安が簡単に感じ取ることができた。

二人ともすでにベルトを腰に装着して戦闘準備はできている。

二人が……タクミがこれから戦おうとしている。

それが、由里には不安で仕方が無かった。

「僕には守りたい人がいる……僕が良いと思ったものを同じ
ように良いと思ってくれる人。だから、その人が……由里ちゃ
んが待っていてくれるんだったら僕は絶対に帰ってくる」

「じゃあ、待つてるよ……だから、絶対に帰ってきなさい!!」

タクミは頷くとサイガの横に立つ。

そして、ファイズフォンに555と入力した後ENTERを押す。

【S t a n d i n g B y】

サイガもバックルを開いてカードを装填する。

【カメンライド・・・】

「「変身！！」」

二人は同時に叫んだ後タクミはファイズフォンをバックル部に突き立てて左側に倒しサイガはバックルを閉じた。

【C o m p l e t e ！】

【ディケイド！】

タクミには赤いフォトンストリームが流れサイガには周りに現れたディケイドのシルエットが重なる。

サイガの頭部にプレートが刺さると二人の変身は完了した。

ディケイドはライドブッカーをソードモードにしてセンチピードオルフェノクに斬りかかる。

ファイズはファイズエッジでロブスターオルフェノクに斬りかかる。

センチピードオルフェノクが振ってきた鞭をかわしながらディケイドはライドブッカーでセンチピードオルフェノクを斬った。

そのまま、反撃する隙を与えずに斬り続ける。

ロブスターオルフェノクのサーベルをファイズエッジで防いだファイズはロブスターオルフェノクを蹴り飛ばすとじゃんぷしてロブスターオルフェノクを斬った。

そのまま、反撃する隙を与えずに斬り続ける。

二人が同時に斬ると二体のオルフェノクは爆発した。

爆発の中からディケイドとファイズは百瀬に斬りかかる。

百瀬はタイガーオルフェノクになると二つの剣をつかんだ。

「人間があ！！まさか、裏切り者と協力するとはな！！」

「ふざけるなあ！！」

タイガーオルフェノクの言葉に怒りを感じたディケイドは掴まれている状態のライドブッカーに体重を乗せてタイガーオルフェノクを斬った。

その攻撃でタイガーオルフェノクがひるんだ隙についてファイズもタイガーオルフェノクを斬る。

「ぐあああああ！！」

「こいつはな・・・自分がオルフェノクだということを悩み続けながらも大切なものを守るために一人で戦い続けたんだ！！俺は知っている・・・こいつの強さを！！だって・・・こいつは自分を裏切らなかったから！！」

ディケイドがそこまで言うのとライドブッカーからカードが三枚飛び出してきた。

ディケイドはそれらのカードを見ながら少し悩んだ後隣にいるファ

イズの左肩をつかんだ。

「力を貸せ……」

「はい!!」

本人の了承を得るとディケイドは三枚の内の一枚を装填する。

【ファイナルフォームライド……ファファファイズ!】

「って、うわあああ!？」

電子音声と同時にファイズの体は変形して巨大なビーム砲であるファイズブラスターに変わった。

ディケイドはファイズブラスターを持つとタイガーオルフェノクに向かって引き金を引く。

「ぐあ!がはっ!!」

強力な実弾をくらったタイガーオルフェノクは地に膝をつくが吠えながらディケイドに向かってきた。

だが、ファイズブラスターの砲身上部にあるポインターから光線が放たれてタイガーオルフェノクは円錐形状の赤い光によって動きを封じられる。

ディケイドは更にカードを装填した。

【ファイナルアタックライド……ファファファイズ!】

カードを装填した後ディケイドは再度ファイズブラスターの引き金

を引いた。

ファイズプラスターから巨大な光線が放たれ身動きのできないタイガーオルフェノクを飲み込む。

タイガーオルフェノクは爆発してその場に赤くΦの文字が浮かんだ。

デイクイドがファイズドライバーを離すとファイズドライバーはファイズの姿に戻る。

「行こうぜ・・・タクミ」

「はい！！・・・っえ？」

戦いを終えた二人は変身を解こうとしたがその直後信じられないことが起きた。

四角錐状の黄色い光がファイズを拘束していたのだ。

「タク・・・」

サイガがタクミの名を言う前に何者かがその四角錐状の光に向かって・・・ファイズに向かって両足蹴りをしてきた。

そして、ファイズの体を通り抜けて紫色の複眼をしファイズと違い赤ではなく黄色、一本ではなく二本のフォトンストリームが特徴の仮面ライダーカイザが地に降りた。

同時にファイズは変身が解けて倒れる。

その体からは青い炎が噴き出していた。

「タクミイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！」

由里が叫びながらタクミに駆け寄った。
ディケイドはすぐにカイザを殴る。

「貴様！！何者だ？」

「・・・痛いじゃないですか？」

「・・・その声・・・水菜か？」

カイザは無言でディケイドの横を通り過ぎた。
だが、すでにディケイドにはカイザの正体が分かっていた。
水菜マサト・・・タクミの正体を知る男。

「さあ、由里・・・僕も仮面ライダーの力を手に入れた。そんな
化け物は放って僕と付き合おう」

由里は驚愕の表情でカイザを見た。
由里もカイザの正体に気付いたのだ。

「・・・何でそんな視線を向けるんだ？」

カイザは困惑した。

怪人を倒しライダーの力を手に入れた自分だったら由里の彼女になれるはずだったのだ。

だから、呼び方も呼び捨てにした。

なのに、由里からの視線は感動や尊敬ではなく・・・憎悪と蔑みだった。

カイザは急に肩をつかまれるとディケイドに殴られた。

「お前．．．なんてことを．．．」

また、ライダーが死んだ。

運命は変わったはずだった。

全てがうまくいくはずだった。

なのに．．．．．タクミは二度目の死を迎えようとしている。

「いい加減にしろよ!」

ディケイドはカイザを殴った。

カイザに反撃する隙も与えずに殴り続ける。

「タクミ．．．．．ねえ、起きてよ．．．．．約束でしょ?」

「ごめ．．．．．んね．．．．．やくそ．．．．．く．．．．．まもれ．．．．．
そうにな．．．．」

由里が差し出した手を何とかんだタクミは．．．．．灰にな
った。

由里はその灰を何度も手でつかむ。

これが．．．．．タクミ?

「いやあああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！！」

彼女は絶叫した。

【error!】

ディケイドに何度も何度も殴られたカイザは殴り飛ばされてベルト
が吹き飛んだ。
そして、水菜マサトの姿が現れる。

「お前……死ぬ覚悟はできてるんだろうな」

「くっ……」

マサトは急いでカイザドライバーを拾おうとした。
だが、できなかった……。

「えっ……？」

その手は灰になっていた。

「なに！？」

ディケイドも驚きのあまり怒りを忘れてしまった。
マサトの体がどんどん灰になっていく。

「ウソだろ……？あのおっさん……力をくれるって言ったじゃないか？……そのためにオルフェノクの因子まで埋め込まれたのに……」

よほど困惑しているのであろうマサトは自分の両手を見ながら小声でつぶやいていた。

だが、すぐに灰となった両手は地面に落ちていき……マサト自身も灰となった。

変身を解除したサイガはその信じられない状況に唖然としたがすぐに由里のもとに向かった。

由里はタクミだった灰を何度もつかんでいる。

「おい……由里」

「先生……私がいけないでしょうか？私がもっと早くタクミのことをちゃんと受け入れてあげればタクミはいなくならなかったのでしょうか？」

サイガはその言葉で何も言えなくなった。

お前は悪くない……悪いのはマサトだ！

言うのは簡単だ……だが、言えるはずがない。

「先生……私が……水菜君の告白を受け入れていればタクミは死ななかったんでしょうか？」

由里は涙を流しながらそう聞く。

答えられるはずがなかった。

そして、いつものようにオーロラが現れる。

次の世界はアギトの世界……。

「お前のせいじゃない」

サイガはそれだけ言ってオーロラをくぐった。

悪いのは……俺なんだから。

『ファイズの世界・・・苦悩』（後書き）

次回予告

また、ライダーを死なせてしまった。どんなにあがいても変わらない運命。常に独りになってしまいうサイガが出会ったのは・・・ある家族だった。

次回

『アギトの世界・・・家族』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3772u/>

仮面ライダーディケイド Lonely Journey

2011年11月20日16時58分発行